私家版

葉山ユタ

中巻

　月曜日、僕は出勤すると何気なく営業部の方に視線を巡らせ、宮下と河原さんの姿を探してみたが、二人共席には着いていなかった。まぁ、これから出勤という事もあるからと考えながら自分の部署へ向かうと、総務のすぐ近くにある応接室から営業部長と宮下が出てくる所とかち合ってしまった。
　部長は苦虫を噛み潰したような渋い顔をして前を睨み、大股で営業部へ歩いて行く。宮下は顔色悪く、足元を見つめながら黙って部長に付き従っていた。お早うございます、という僕の遠慮がちな挨拶は二人に無視され、何とも気詰まりなまま宙に消えた。

　これはまずい事になったんじゃないだろうか……。
　僕は自分のデスクに一旦座り、周りに挨拶してからすぐに席を立った。営業部が朝礼に入る前に確かめておきたい。男性用のロッカーが並ぶ狭い廊下のはずれに給湯室がある。女性社員が三人ほど洗い物などしていたが、僕はそこに松井さんの姿を見つけた。

「松井さん、お早う」
　女性ばかりがいる所で声を掛けるのは気が引けたが、そんな事を言っている場合ではない。
「あ、篠田係長、お早うございます」
　松井さんは声を掛けられて一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに用事の見当がついたらしく、後を後輩の女の子に任せて廊下まで出てきた。
「忙しい所悪いね。あの…河原さんは今日出勤してないのかな？」
　小声で質問した僕に、松井さんは周囲に誰もいない事を確認してから声をひそめた。
「今朝ですね、体調が悪いから休むって電話があったんです。あ、私が取ったんですけど、その電話。それで、その時…」

　また周りを見回し、更に声を落とした。
「部長に代わってくれって言われたんですよ」
「営業部長に？」
「そうなんです。何だか分からないけど、兎に角代わったんですよね。そしたらその後、部長のご機嫌が悪くなって、宮下主任が出勤したら、すぐ応接室に呼べ！　って席を立って…。もう終わりました？」
「うん、今出てきた」
「……これは修羅場ですよねぇ」
「さぁねぇ……。いや、ありがとう」

　僕は要点だけ聞いて、すぐに自分の席に戻った。宮下は、彼女と上手く別れる事が出来なかったようだ。関係した人達全員が嫌な思いをしているのだろうと想像すると、僕の方まで気が滅入る。河原さんが部長に何を言ったのかは分からないが、宮下についてあまり良くない話しをした事は見当がつく。仕事が終わり、家に帰って着替えた後も、僕は宮下と聡美ちゃんの事が気になって落ち着かなかったが、自分から電話をして様子を聞くわけにも行かない。

　ここ数年、あまり付き合いの無い状況ではあったが、入社当時の青くさい時代を共有した数少ない友人

の一人なのだから、出来る事なら力になりたい。
　宮下の事を気にかけながら、パソコンを立ち上げ、習慣通りにメールチェックをすると、真麻さんから返事が届いていた。送った装幀の画像を見て気に入った事と、今度是非見せて触らせて欲しいと書いてあった。

　そうそう、やっぱり触ってみたくなるよな。僕は真麻さんの返事に満足し、自分の装幀を気に入ってもらえた事が嬉しかった。薄情にも、僕は真麻さんからの短いメールを読んだだけで気分が変わり、宮下夫婦の危機をつかの間忘れたのだった。

　その次の日も河原さんは出勤せず、宮下は又、上司から別室に呼びつけられたらしい。宮下の事も聡美ちゃんの事も気になってはいたが、彼と話をする切っ掛けはなかなか見つからず、若い社員達が無責任な噂話に花を咲かせているのに釘を刺すくらいしか出来なかった。

　そして翌水曜日の午後、驚いた事に、河原純が僕のいる総務課に現れた。いつものビジネスカジュアルな様子ではなく、フワフワしたミニのワンピースとショートパンツ、素足にミュールと言う、街に遊びに行くような、かなり露出度の高い服装だったので、ああ、これは仕事に来たのではないな、とすぐに分った。普通ならこういう時、女性社員が気を利かせて席を立ち用件を聞くのだが、河原さんは同性には人気が無いのか、皆んな下を向いて知らん顔をしている。

　総務課長はカウンター越しに、済みませんと声を掛けてきた彼女に露骨に嫌な顔をし、僕の顔を見て顎をしゃくった。仕方なく僕が立ち上がり、どうしましたと用件を聞くと、彼女は挑戦的に顎を上げ、僕を睨むようにしてはっきりとした声で言った。
「退職願を出したいんですけど、書き方教えて貰えます？　それと退職時の条件とかも教えて下さい」
「……分かりました。ただ、退職希望となると直属の上司と話して頂きたいし、色々説明も有るので隣の応接室で待っていて下さい」

　僕は総務の女性職員に応接室にお茶を出すように頼んでから、自分のパソコンにロックを掛け、退職時に必要な提出用の書類を集めた。隣の武田君が別の職員と顔を見合わせ、やっぱりねー、などと話している。営業部に内線電話を掛けたところ、管理職で席にいるのは課長だけだった。代わって貰い、河原さんが来ていて退職願を出したいと言っているので同席して頂きたいと頼むと、大きくため息をついてから、少ししたら行くと言い電話を切られた。

　書類を持って応接室に行くと、河原さんは黒革のソファにゆったり座り、大きく足を組んで浮いた方の足のミュールをブラブラさせている。その無遠慮とも言える態度は、ここで働く気はもう無いと言う強気のアピールのようにも見え、意外に子どもっぽいところが有るんだなぁと今更ながらに思う。僕はローテーブルを挟んで彼女の前に座り、数枚の書類をテーブルに置いて、硬い表情の彼女に話しかけた。
「今、課長が来るので一寸待っててね。直属の上司の許可も得ずに、僕が勝手に退職の手続きを進められないから」

　河原さんは嫌そうに眉根を寄せ、片手で長い髪の毛先をいじり出した。
「先に書類の書き方教えて下さいよ。時間が勿体無いじゃないですか。課長だって部長だって、辞めて欲しいって思ってるんだから、私が依願退職したら大喜びでしょ？」
　イライラとまくし立て、急にそっぽを向いて黙りこむ。その様子は、怪我をした若い獣が虚勢を張っているかのようで、何だか痛々しい。昔、ちょっとだけ彼女の美しさに惹かれた事を思い出した。もっとも、その性格のきつさには自分と相容れないものを感じたわけだが。

「君も辛いんだろうけど、退職しなくても異動を希望するって方法も有るんだよ」
　慰めになるかと思って提案してみた僕を、河原さんはキッと睨みつけた。
「私が悪いみたいな決め付け、止めて貰えます？」
　確かに、この場合悪いのは彼女だけではない。宮下も同罪なのは分っているし、異動も退職も、宮下には選択する必要が無いと言うのは不公平かもしれない。

「……そうだね、ただ、それぞれが一番いい着地点を見つけた方が、今後の為じゃないかと思って」
　僕の言葉に、河原さんの顔がカッと赤くなった。恥ずかしさに赤面したのではなく、怒りに燃えているからだ。
「会社として穏便に済ませたいって意味ですか？　大体、私、篠田さんにあれこれ言われる筋合い無いと思います」
　彼女が言い終わると同時に応接室のドアが開き、営業の新藤課長が姿を現した。四十代前半で顔の浅黒い、豪快なワンマンタイプで、彼女の事を高く評価していた人物だ。反射的に河原さんは立ち上がり、両手の指をお腹の前で揃えて頭を下げた。こういう態度は、習慣として身体に染み付いているものらしい。僕も立って、課長に自分の隣の席を勧めた。

「今、お茶を持ってこさせます」
「ああ、要らない。すぐ戻らなきゃならん」
　課長はドスッと音を立ててソファに掛け、河原さんも静かに元の位置に座った。さっきの勢いはすっかり影を潜め、まるで病み上がりのように辛そうな表情をしている。新藤課長は自分が目をかけていた彼女が社内で不倫をし、上司を巻き込んで課内を混乱させた挙句、挨拶も無しに突然退職したいと総務にやってきたのだから、面白いわけが無い。怒気を含んだ目で彼女を睨みつけていた。

「もう辞めるって決めているんだろうから、引き留めはしないけどね、こんなにあっさり辞めるんなら、あんな大騒ぎしなくても良かったんじゃないの？」
「……申し訳ありません」
「辞めた後、君がどうしようと知った事じゃないけどさ、ま、他人の家庭を壊すような事はしない方が身の為だよ。後生が悪い。篠田係長、書類の事とかは任せるわ。報告だけしてくれればいいから。じゃぁお疲れ様」

　河原さんが何か言おうとしたが、課長はすぐに席を立ち、振り返りもせずに部屋を出ていった。しんとした重苦しい空気の中、彼女の様子を見ると、毅然とした態度でテーブルの上を見つめているが、その見開かれた大きな瞳は涙で潤んでいた。数秒沈黙が流れたが、僕は気を取り直して彼女に退職の手続きの説明を始めた。彼女もバッグの中から手帳とペンを取り出して、大人しく話しを聞いてくれた。印鑑も用意してくれていたので、その場で必要書類の記入は終わり、僕は保険や離職票などの説明も一通りして全ての手続きは完了した。残った有給休暇は買い上げする事にした為、彼女は今日で自由の身だ。

「じゃぁ、後で分からない事とか不安な事とか出てきたら、いつでも電話して下さい。僕らは、退職する社員の損になるような事はしないから」
　この時、初めて河原さんの表情が和み、僕に向かって頭を下げた。
「ご迷惑おかけして済みません」
「いえ……。河原さんはまだ若いんだから、ヤケにならないで、いい人生にして下さい。長い間お疲れ様でした」
　僕が頭を下げると、フッと彼女が笑った。
「篠田係長は優しいですねぇ。私、優しい男の人苦手です」

「そう？　それは残念。それじゃ出口まで送るよ。そこでセキュリティカードを返して貰うから」
　僕が先導して応接室から出口まで彼女と歩くと、社内の人間が皆んな顔を上げ彼女に注目していた。僕には後ろにいる彼女の表情は分からないが、きっと昂然と顔を上げ、モデルのようにシャンとして歩いているのだろう。オフィスのドアを出た所でカードを返して貰い、エレベーターホールまで送ると、彼女が下りのボタンを押して僕に尋ねた。

「篠田係長は宮下主任と同期なんですよね？」
　この質問、最近何度訊かれただろうか。
「そうだよ」
「奥さんともお知り合いですよね？」
「うん、同期だからね」
「可愛かったですか？　昔」
「今も可愛い人だよ」
「……ふぅん」
　チンと音がして、エレベーターが着いた。
「宮下主任に、お元気でとお伝え下さい」
　僕が吃驚して彼女の顔を見ていると、エレベーターのドアが開いた。
「言っとくよ」

　エレベーターに乗り込んだ彼女がこちらを振り向き、ニコリと笑ってドアが閉まった。摩擦熱どころか台風みたいな恋だったのだろう。彼女のように情熱的な恋愛体質の女性を、上手く扱える男は滅多にいないと思う。聡美ちゃんの気持ちを考えると、そうそう感心してもいられないが、それでも僕は、彼女の後先考えずに突っ走った若さと情熱が、少しばかり羨ましくもあった。

　宮下はこの日、得意先回りで直行直帰したらしく、僕は彼に河原さんの言葉を伝える事は出来なかったのだが、家に帰り食事もシャワーも済ませた夜の十時過ぎ、聡美ちゃんの携帯から電話が入った。
「篠田君、遅くにごめんね。今、大丈夫？」
「ああ、僕は全然。聡美ちゃんは大丈夫？」
「うん……。ちょっと話したいんだけど、いいかな？」
「いいよ。僕は一人だから遠慮は要らないよ」

　聡美ちゃんはちょっと黙り込んだ後、遠慮がちにこう言った。
「今、車の中で、近くまで来てるんだけど、何処かで会えない？」
「え？　今から？」
「うん……あ、やっぱり迷惑だよね、ごめんね」

　声の弱々しさに、何か尋常では無いものを感じる。今、会わないとまずいのかもしれない。
「いや、いいんだけど……そうだね、家の近くにファミレスが在って、確か二時くらいまでやってるんだけど、そこでもいいかな？」
「いいよ。どの辺り？」

　僕はざっと場所を説明し、十五分くらいで行くと伝えて電話を切った。一瞬、自宅に呼ぼうかとも思ったが、部屋の中は取り散らかしているし、何よりこの時間に女性を部屋に招くのは不都合だろうと外で会うことにしたのだ。すっかり家で寛いでいたので、慌てて服を着替えて手櫛で髪を整え、財布と携帯を持って家を出た。外へ出ると、雲の少ない夜空には上弦の月が白く浮かんでいて、悩み事さえなければ、散歩するのに気持ちの良い夏の夜だ。

　こんな時間に外出するのは久しぶりで、僕は暗い夜道に漂う近所の庭の夏草の匂いや、街路樹の根元から聞こえる虫の鳴き声を懐かしく感じながらも、聡美ちゃんの事が心配で道を急いだ。
　十分ほどで指定したファミレスに着いたが、平日のこの時間でも駐車場には、結構な数の車が停められていた。入り口で中を見渡したが、まだ聡美ちゃんは着いていないようなので、見つけ易いよう駐車場側の窓際の席に案内して貰う。ウェイトレスが来て水とメニューを置いて行くのと入れ違いに聡美ちゃんが現れたが、以前に会った時とは違い、ベージュ色のカチッとしたワンピースを着てきちんとお化粧もしていたので、仕事帰りのキャリアウーマンのようだ。ちょっと憔悴した様子だったが、僕の前の席に座った時には笑顔を浮かべた。

「ごめんね、こんな遅くに突然呼び出して」
「気にしなくてもいいよ。取りあえず、何か飲み物でも？」
　二人でアイスコーヒーを頼み、数秒黙りこんだ後、聡美ちゃんが口を開いた。
「今日ね、子供達を実家に預けて、バツイチでシングルマザーの友達に色々相談してきた……」
　僕が二の句を継げず黙っていると、彼女はそのまま話しを続けた。
「二人でちょっと遠くまでドライブしてきたんだけど、帰りに彼女を家に送り届けて一人で晩ご飯済ませたら、もういい時間になっててね。疲れたけど家には帰りたくないし、とは言え行く所も無いし……」
「それで篠田の奴でも呼び出してみようかと？」

　僕がちょっと混ぜっ返した事を言うと、沈鬱だった表情の聡美ちゃんが弱々しく笑った。
「そうそう。篠田君はいつもニュートラルだからね、相談してみようかなって思って……」
「うん……。僕、まだ宮下と話すきっかけが掴めなくてさ……河原さんは、今日付けで退職したんだけど、話しぶりでは、その……別れるって決めたみたいだったよ」
「ええっ？　私の家に押しかけて来てから、まだ一週間も経ってないのに？」
「そう。まぁ何と言うか、若いよね……」
「……バッカみたい！　その子、頭、オカシイんじゃないの？」

　吐き捨てるような彼女の言葉に、アイスコーヒーを持って来たウェイトレスが驚いて立ち止まった。僕が無言でウェイトレスに頷くと、聡美ちゃんはハッとして下を向いた。ウェイトレスがアイスコーヒーと伝票を置いて立ち去るのを待って、僕らは話しを続けた。

「まぁ、何だろうねぇ、彼女の気持ちは良く分からないけど、目が覚めたのかな？　憑き物が落ちたような顔してた。それで、宮下は何て？」
「土曜の深夜に戻って来た時、別れてきた、ごめんって。魔が差したけど本気じゃないし、彼女も意地になってるだけだって……。でも次の日、上司に有ること無いこと告げ口されたらしいわ」
「ああ……呼び出されてたな、そう言えば」
「左遷されるかもって言ってたけど、何だか私、一緒に行ける気がしない。前にも一度、取引先の女の子と浮気して、もうしないって約束したのに」

　僕は何と慰めてあげれば良いのか分からなかった。元の鞘に収まって欲しいとは思うが、明らかに非の有るあいつを許してやってくれとは言えない。
「君の気持ちは分かるけど、結論を急がない方がいいよ。宮下も今回は流石に懲りただろうし、君と別れたくはないだろう？」
　聡美ちゃんの目にうっすら涙が浮かんだ。
「大事にされてる気がしない……」

　夫婦のことや男女の仲については、うっかり知ったような口を利けない。何せ、本当に重要な事や核心について、当事者はそう簡単に周囲には漏らさないのだから。僕はもしかしたら辛い結婚生活を送っているのかもしれない彼女の心情を想像して、何も言えなくなってしまった。グラスの中の氷が、カランと涼やかな音を立てたすぐ後、彼女のバッグの中で携帯のバイブが低く震動を始めた。聡美ちゃんはその音に気づいているが出ようとしない。ひとしきり鳴って電話は切れた。

「子供達は？」
「あの人が迎えに行って、寝かしつけたと思う。たまには子供達とも遊んで欲しいしね」
「君も適当に息抜きして、あいつに奥さんの有り難味を思い知らせてやればいいさ」
　聡美ちゃんはかすかに微笑み、手を付けずにいたアイスコーヒーにストローを挿して少し飲んだ。黄色がかった暗めの照明の下で見る彼女は、すっきりと痩せた、いかにもしっかりした頭の回転の早い女性に見える。二十歳くらいの頃は、溌剌とした頬の丸い可愛い女の子だったが、こうして見ると随分変わった。つまりは大人になったのだろう。宮下も、新婚当時と比べれば、見た目も中身も大分変わったと思う。

　僕だけ、何だかあまり変化がないのは、やはり十年一日の如く、独りで同じような生活をしているせいだろうか。皆んなそれぞれ、自分の自由と引き換えに他者と係わり、伴侶を得て生活を変えてゆく。それはとても自然で、幸せと安定を求める当たり前の選択なのだけれど、僕はそういう機会を上手くキャッチ出来ないまま歳を取ってしまったようだ。
「二人はお似合いの夫婦だと思っていたんだけど。子供達も可愛いし、幸せでいて欲しいなぁ……」

　僕の言葉は自分でも上滑りな慰めに思えたが、他に言うべき言葉が見つからなかった。彼女は、ちょっと首を傾けて悲しそうな顔をしたが、突然思い付いたように訊いてきた。
「篠田君は、誰か気になっている人とかいないの？」
　彼女の質問に、ある女性の顔が思い浮かぶ。色白で人形のような顔をした若い人妻。
「いないこともないんだけどねぇ……」

　言葉を濁してアイスコーヒーをすする僕の顔を、聡美ちゃんが面白げに覗き込む。
「いるんだ！　仕事関係の人？　脈は有りそう？」
「いや、仕事は関係無いけど。まぁ無理だね。お互い、そういう対象じゃないし」
「えー？　どういう事？」
　僕はただ曖昧に笑って答えを誤魔化した。夫の不倫問題の渦中にいる女性に、一回りも年下の既婚女性が気になるなんて言えるわけが無い。彼女が次の質問をしようとした時、再び彼女のバッグの中の携帯電話が震えだした。聡美ちゃんの表情が硬くなり、黙りこむ。

「出てあげたら？　夜も遅いし心配してるんだと思うよ」
「どうかしらね」
　彼女はチラリとバッグの方を見ると、両手でテーブルに頬杖を付き、ため息を漏らした。
「仕返ししてやろうかしら……」
「仕返しって、どんな？」
「目には目を歯には歯をってね」
　それは、浮気には浮気という意味なのだろうか。僕がじっと彼女の表情を伺っていると、聡美ちゃんは照れたように笑い出した。

「まぁ、私には無理だけど」
「うん。しない方がいいよ、そういう事は」
「やっぱ、ダメか……」
「後で後悔する」
　多分、生真面目な彼女がそんな事をしたら、後悔どころか絶望するだろう。聡美ちゃんは河原さんとは違う。彼女はしばらく黙ったまま、横目で自分のバッグを見つめていたが、とうとうバッグに手を伸ばし、チカチカと青いランプを点滅させている携帯電話を取り出した。

「ちょっとメールだけ送っとくね」
　そう言うと携帯を開き、カタカタと短いメールを打ってすぐに携帯を閉じ、フーっと又ため息を吐いた。
「帰るの嫌だなぁ……」
「今逃げると、後がもっと大変になるよ」
「まぁ、篠田君も言うじゃないの」
　時計はとうに十一時を過ぎている、今ここを車で出れば、日付が変わる前に聡美ちゃんは家に帰れるだろう。
「君の家なんだから、胸を張って帰ればいいさ」

　僕は伝票を掴んで立ち上がり、彼女にも席を立つよう促した。どうしても今日中に家に帰した方がいいような気がしたのだ。彼女はノロノロと立ち上がり、バッグを手に取った。
「久しぶりに会った篠田君は、何だか男っぽいわねぇ」
「昔は女っぽかった？」
　レジに向かって歩き出す僕の後ろで、聡美ちゃんが吹き出す。
「そうじゃないけど、ちょっと頼りなかった」
「でしょうねぇ」

　男らしくて仕切りが上手く、遊び好きな宮下と一緒にいたら、僕みたいなタイプは一歩後ろに退かざるを得ない。あいつが発する光が眩しすぎたのだから、僕は当然、影になって暗く見えただろう。レジで自分が払うと言う聡美ちゃんを制して代金を払い、一緒に駐車場まで出て、僕は歩いて帰ろうと思ったが、聡美ちゃんが帰り道だから送ると言うので、お言葉に甘え、助手席に乗せて貰う事にした。車は小柄な彼女にはふさわしくない大型の SUV だ。

「おっきいの乗り回してるねぇ」
「旦那の趣味よ。私は軽でもいいんだけどね」
　芳香剤の甘い香りがする車に乗り込みシートベルトを締めると、ハンドルを握った彼女が少し真面目な顔で僕の横顔を見ているのに気が付いた。
「何？」
「……ドライブしようか？」
「僕のアパートまでね」
「……泊めてくれる？」
「ダメ」
「やっぱりねー」

　聡美ちゃんはエンジンをかけ、静かに駐車場から車を出した。徒歩十分の道のりを車で走ったので、道を説明しているうちに僕のアパートまで着いてしまった。シートベルトを外し、じゃぁ、と声を掛けたが、聡美ちゃんは前を睨んで返事をしない。
「気を付けて、真っ直ぐ帰れよ」
　そう言った僕に、彼女は意外な事を言った。

「恵美ちゃんと篠田君、あんなにあっさり別れると思わなかった」
「恵美ちゃん？」
　僕は一瞬、彼女が口にした名前が誰なのか分からなかったが、すぐに一時付き合っていて振られた同期の女性の事だと気が付いた。十年以上も前の事を持ちだされ、僕は思わず苦笑した。

「そんな大昔の話、何で急に」
　暗い車の中で、街灯のオレンジ色の光を受け、彼女の瞳は濡れたような光を帯びて輝く。こういう暗い空間では、女性は色っぽく艶かしく見えるものだ。
「彼女が篠田君を好きだって言うから、私、引いたのに」

　意味が分からず戸惑う僕に、すっと彼女の顔が近づき、僕の唇に優しく自分の唇を重ねた。彼女を押しとどめる事も出来たはずだが、僕は雰囲気に飲まれたのだろうか。ただ、為すがままに彼女の唇を受けてしまった。ほんの一秒かそこらの軽いキスだったが、静かに顔を離した後、彼女は恥ずかしそうに睫毛を伏せて言った。
「これで少しはあの人を許せる気になるわ。ごめんね、お休みなさい」
「……お休み」

　僕は何が何だか分からないまま、車を降りてドアを閉めた。聡美ちゃんが小さく手を振って車を発進させ、シルバーの SUV は静かに闇に溶けて行く。僕はと言えば、彼女の車のテールランプを見つめたまま、夜風に吹かれてアパートの前にしばらく突っ立っていた。不意に強い風が吹いて肌寒くなり、僕はぼんやりと今起こった事を考えながらアパートの自分の部屋へ戻った。すぐにパジャマに着替え、灯りを消して倒れるようにベッドに転がると、車の中で見た聡美ちゃんの眼差しが生々しく脳裏に蘇る。

　キスなんて、本当に久しぶりだ……。泊まりたいって、本気だったんだろうか？　胸の疼きにハッとし、頭を振って彼女の残像を追い払う。
――止めよう、考えても仕方の無いことだ。

　何にせよ、僕は聡美ちゃんに恋愛感情は持っていないのだし、あれで宮下達が関係を修復出来るのなら、僕も役に立って良かったじゃないか。闇の中、考えるのを止めて眠ろうと目をつぶったものの、僕の頭の中では、若い頃の皆んなとの思い出や最近の出来事が、グルグルと立ち現れては反復され、興奮して全く寝付けない。その上、聡美ちゃんの柔らかな唇の感触まで思い出されて一層悩ましく、僕は遂にろくろく眠れないまま朝を迎えた。

　今日が金曜日ならまだしも、木曜とはしんどいな……。
　ベッドでうつ伏せになったまま悶々としていると、そのうち目覚ましのベルが鳴り出したので、僕は寝るのを諦めて目覚ましを止め、寝不足の重たい体を起こした。ぼんやりした頭のまま身支度を整えて朝食を取り、いつも通りの時間に会社の入っているビルに着き、欠伸をかみ殺しながらエレベーターを待っていると、同じく寝不足の顔をした宮下がやってきた。

「宮下、お早う」
「おう、圭介、お早う」
　社内では肩書きを付けて名前を呼ぶ不文律が有るのだが、この朝はお互い、仕事がらみではなく個人として話しをしたかったのかもしれない。宮下は僕の横で、豪快に大あくびをしている。昨日、聡美ちゃんは家に帰ってどうしただろう。気にはなるが、そんな事は聞けないし、それに僕は河原さんから宮下宛に伝言を預かっている事を思い出した。
「寝不足か？」
「ああ……。ご存知のように、俺は今大変なんだよ。会社に居るのも落ち着かないし、家に居ても寛げねぇ」

　僕は周りに社内の人間がいない事を確認してから、宮下に早口で言った。
「河原さんが昨日付けで辞めたけど、主任にお元気でと伝えて下さいって言われたよ」
　宮下は、ちょっと口を尖らせて鼻で笑った。
「フッ、あれは悪魔だぞ。あー、女だから魔女か」
　エレベーターのドアが開き、僕達は他の人達と一緒に乗り込んだ。
「圭介、そのうち飲みに行こうぜ。同期も俺ら二人だけになっちまったし、たまには付き合え」
「いいけど、お前のとこが落ち着いてからな」
「そうだな」

　宮下の口ぶりだと、聡美ちゃんは夕べ僕と会った事を宮下に言ってないらしい。あの時、彼女がした行為は、ただ彼女の心の持ち方の為に必要だったのだろう。聡美ちゃんが夫婦の関係をどうしたいのかは僕には分からない。対岸の火事と思っていた他人の恋愛問題に、いつの間にか自分が巻き込まれていたのが何だか奇妙だが、僕は聡美ちゃんのした事と言った事を、取りあえず忘れてしまう事にした。多分、それが一番良い方法なのだ。僕と彼ら、両方の為に。

　結局、宮下の不倫騒動は、河原さんが体調不良を理由に依願退職した事でうやむやに終結し、宮下が会社から受けたペナルティは、二三度上司に説教をされ、始末書を書かされただけで済んだ。噂が広がるのは早く、彼の処遇については女性社員から不評だったが、会社側も成績の良い営業マンのやる気を損なうような事はしたくなかったのだと思う。

　僕はいつもの様に淡々と仕事をこなしながら、胸の内は落ち着かなかった。家に帰ったら、装幀のデザインを考え、表紙用の布の裏打ちでもしようと思う。美しさを求め、それを創りだす為に手を動かしていれば、僕の雑念は晴れ、気持ちは豊かに満ち足りて行くのだ。

　パソコンの画面に疲れ、顔を上げて窓の外に目をやると、青空は少し色が薄く、うろこ雲が白くたなびき切れ切れの模様を描いていた。赤とんぼが一匹、すーっと透明な羽をきらめかせて窓を横切った。夏は少しずつその勢いを無くし、徐々に秋の爽やかさが空気に忍び込んでいるのを感じた。

浩平

　木曜の朝、私は落ち着かない気持ちを持て余し、イライラと鏡の前で化粧をしていた。これから浩平と会うのかと思うと、緊張で吐きそうになる。それでも、自分で会うと決めたのだから逃げるわけにはいかない。一応、彼に見てもらおうと、最近の作品や自費出版した本も持って行くつもりで準備はしてある。私は昔話をしに行くのではない。これからの自分の糧とする為に、彼に会うのだ。

　夫は今晩、会食があるので遅くなると言っていたので、時間を気にしないで済むのは有難い。私には良く分からないが、医者仲間や製薬会社の営業の人達との付き合いは大事らしく、夫は月に一度くらい、深夜まで飲んで帰ってくる。彼の元妻も交際範囲が広く、しょっちゅう飲みに出かけていたらしいが、私は逆で飲みに誘ってくれる人など誰もいない。

　そう言えば、近々温泉にでも行こうと言っていたけど、日程は決まったのかしら。あの人は私に都合なんて有るわけが無いと思っているのだろうけれど、私だって早めに教えてくれた方がいいに決まってるのに。
　化粧を終えて髪をまとめ、何を着て行こうかと考える。あんまりお洒落をする必要も無いだろうが、彼に結婚してつまらない女になったと思われるのは嫌だ。細身のジーンズにタイトなブルーのＴシャツ、ベージュの麻のジャケットを着て姿見の前に立つと、まだ学生でも通りそうな気がする。

　私は時間を確認し、バッグとポートフォリオを持って家を出た。約束の時間に少しくらい遅れたって構わない。浩平は待ち合わせの時間に間に合った試しなんかなかったのだから。
　朝晩は大分涼しくなったものの、今日も空は晴れ渡り、これから暑くなりそうだわ。待ち合わせの場所は、繁華街から少し外れた住宅街にあるカフェで、大正時代に建てられた二階建ての木造建築を改装したものだ。夜にはバーになるので、週末の夜などは若者で混雑するが、平日の午前中は割に空いていて、近所の高級マンションに住む主婦達がお茶を飲みに来る程度だ。久しぶりに来てみると、外壁の半分ほどが蔦で覆われ、建物の外観が分からない程になっていた。

　歪んだガラスを嵌め込んだ木のドアを開けると、古風な木の丸テーブルを幾つか置いたフロアーには、案の定、二三組の女性客が談笑しているだけだった。私達はいつも、二階の屋根裏を改装したような、天井の低い三畳ほどの小上がりを利用していた。進み出てきた若いウェイターに、二階は空いているかと聞くと、肌つやの良い丸顔に笑顔を浮かべ、お待ち合わせですか、と訊いてきた。
「ええ、そうです。もう一人来ます」

　彼はパッと顔を輝かせ、顔立ち同様の子どもっぽい声で嬉しそうに言った。
「男性の方で、十一時からお待ち合わせと仰っていた方が二階の奥のお席にいらっしゃいますよ。その方かも知れませんね」
　店内の時計は十一時三分前だった。あの人、時間より早く来たのかしら。
　私はウェイターにアイスのレモンティーを頼んでから、狭くて急な木の階段をゆっくり上った。この古い階段は一歩上るごとにギシギシと不穏な声を上げ、一段の幅も狭い上に摩耗して滑りやすく、上り下りにはいつも緊張したものだ。

　階段を上りきると、やはり狭い廊下があり、片側には襖を開いた小さな小上がりが三つ並んでいる。私はバッグを胸の前で握りしめ、激しくなってきた胸の鼓動を抑えつけるようにして、ゆっくり奥の間に進んだ。浩平がいたら、どんな顔をして挨拶したらいいのかしら。何度も頭の中でシュミレーションしてきたのに、いざとなると頭が真っ白で何も考えられない……。

　コツリコツリと私のヒールが、磨り減った黒い木の床に当たって廊下に響く。もう少しで一番奥の部屋の前に着いてしまうと思った時、そこから誰かが立ち上がり顔を覗かせた。半身を現した痩せた男が静かに私に笑いかける。一瞬見違えたが、それは確かに谷崎浩平だった。
　数年ぶりに会う浩平は、髪を短めに切り、こけた頬から顎にかけてうっすらとひげを生やしていた。それは私のまるで知らない、少し荒んだ生活を匂わせる大人の男だった。
　かつては長めの前髪を真ん中から分け、私からピンを借りて、邪魔な髪を女の子の様に留めていた、澄んだ目をした陽気な若者は、もう何処にもいないらしい。

「マーサ、久しぶり」
　凍りついたように廊下で立ち止まった私に、屈託なく浩平が話しかける。
「……久しぶり。早いのね」
　何とか平静を装って上がり框で靴を脱ぎ、中国風の低い座卓を挟んで、彼の向かいに用意されている座布団に座った。座卓に置かれた織部の灰皿には、既に数本の煙草がもみ消されていた。飲み差しのアイスコーヒーは、融けた氷のせいで水のよう。だいぶ前から来ていたのだろう。彼は私が灰皿を見ているのに気が付いたようだ。
「窓、開けておいたんだけど、煙草臭いかな？」

　壁に穿たれた小窓は全開で、鬱蒼と木々の繁る庭を通って風が吹き込み、青臭い夏草の匂いを運んでいた。
「大丈夫よ」
「閉めようか、冷房が無駄になるし」
　彼が小窓を閉める為に腰を浮かすと、丁度ウェイターが私のアイスティーと水を持って現れ、伝票に追加分を記入してから丁寧に頭を下げて戻って行った。浩平が窓を閉めている間に、私は氷の入った冷たい水を喉に流しこんで一息ついた。

　暑い……。緊張のせいか、狭い空間に熱気がこもっていたのか、こめかみ辺りに吹き出した汗をハンカチで拭くと、再び腰を下ろした浩平が、窓の方を見つめたまま呟く。
「残暑だね……」
「そうね」
　俯いた私の顔を、彼がじっと見つめているのを感じるけれど、私は水の入ったグラスを両手で握りしめたまま、顔を上げることが出来なかった。すると、浩平はやおら自分の座っている座布団を外して私の斜め前辺りに座り直し、両手をつき畳に額をくっつけるようにして頭を下げた。

「申し訳ない！」
　この後、彼は事故の事や、見舞いも連絡もせずに逃げてしまった事などを延々と詫びた。私はと言うと、彼の謝罪の言葉を、何だか夢の中かプールの底ででも聞いているように、ぼんやりと切れ切れにしか認識出来なかった。
　何だか、もうどうでも良かった。私が長い間、頭の中で思い描いていた彼なんて、もう存在しないのだ。全てはとっくに終わった事で、私はこの人を憎んでもいなければ恨んでもいない。勿論、好きでも嫌いでもない。お互い、とうに別々の道を歩み、遠くまで来てしまっているじゃない。今更、過去に引き返せるものでもない。この人を好きで好きでどうしようもないくらい魅了されていた事すら、何だか嘘か気の迷い

みたいに思える。

　私が、浩平にずっと持ち続けていたわだかまりに、やっと今、決着がついたのだ。もう、いいじゃないの。
「昔の事はもういいのよ。お互い無事で良かったわ。それより、浩平は今、何か描いてるの？」
　平坦な私の言葉を聞いて浩平は顔を上げ、拍子抜けしたように私の顔をぼんやりと見つめた。
「いや、もう絵はあんまり……。ま、全然やってないってわけでもないんだけど」
「今、何をやってるの？」

　浩平はちょっと苦笑いして、首の辺りを掻いた。その時私は、彼がこの残暑の厳しい中、長袖のシャツを着ているのに気が付いた。袖口から覗く手首の辺りには、一見、本物のブレスレットに見える凝ったタトゥーが彫られていた。
「彫師なの？」
「さすがマーサは察しがいい」

　浩平が右腕の袖を捲り上げると、手首のブレスレットのタトゥーから上には、動物や植物がうねり、絡み合い、輪のように繋がって行く緻密な文様が墨一色で彫られ、二の腕から肩辺りまでを覆い尽くしている。学生時代に、小さいものを体の目立たない場所に彫っているのは見ていたが、こんなに広範囲に彫られているのを間近に見たのは初めてだったので、私は少なからず驚いた。まさか、プロになるなんて……。

「ケルト文様ね」
「ビンゴ！」
　親指を立てておどける仕草は昔のままだ。
「彫ったのは当然俺じゃないよ。俺の同僚、と言うより共同経営者だけど、俺のデザインをそいつに彫ってもらってるんだ。それで、そいつの身体には俺が彫ってやるわけ。お互いがお互いのカタログを持ち歩いているようなもんだよ」
「ふぅん。その人、女性？」
「いや、残念ながら男だ。サロンには女性の彫師もいるけどね。ファンシーな柄とか、客が女だと、やっぱり女の彫師の方が受けがいいから」
「タトゥーのサロンねぇ……。それって開業に何か資格みたいなもの要るの？」
「法律では医師免許が必要ってなってるけど、ザル法だよ。医者がこんな事、やってられないだろ？　まぁ、エステサロンと同じようなもんだね」

　彼があの緻密で美しい絵を描く事がもう無いのかと思うと、とても残念ではあったが、そのタトゥーのデザインにも彼なりの拘りを感じられて興味深かった。
「ちょっと脱いでみて」
「え？　ここで？」
「上だけでいいわよ。どうせ全身に彫ってるんでしょ？　どんなのか見せて」

　彼は渋々という顔でシャツを脱ぐと、あまり厚くない胸板を見せてくれたが、その両腕、肩、胸、腹に、隙間なくビッシリと様々な文様のタトゥーが彫られていた。それは墨だけではなく、カラフルな彩色を施されたものも有れば、白く点描されて、良く見ないと柄の分からないものもあり、まさに彼の言う通り、歩くタトゥーのカタログだった。
「壮観ね」

「背中はもっとスゴイぞ」
　体を捻って後ろを向いた彼の背中を見て、私は息を呑んだ。一般に背中一面に彫られている刺青と言うと、イメージされるのは昇り龍や牡丹、弁天様と言ったところだろうか。欧米風のデザインなら聖母マリアやピンナップガールを想像する。
　しかし、彼の背中に彫られているものは、タトゥーという媒体を借りた一連の絵物語だった。鎖に繋がれボロをまとった蓬髪の男。着飾った妙齢の高貴な女。丸盆に載せられた血を流す男の首。そして、その盆を掲げ、死んだ男の唇に自分の唇を寄せる半裸の若い娘。

「……これは、サロメ？」
　人物の衣装や、周囲に散らされた花鳥は和風のモチーフで統一され、彼独自の解釈で表現されているが、それは間違いなく聖書に題材を取り、オスカー・ワイルドが戯曲化した「サロメ」の登場人物に違いない。墨一色ではあるが、ビアズリーとはまた違う、何と言うか優しい艶めかしさを醸しだす彼独特の人物像は、とても魅力的でまたエロティックだった。言っては失礼かもしれないが、タトゥーで終わらせるには勿体無い「絵」だった。

「マーサは本当に話が早くていい。そう、サロメのシーンを幾つかに分けてデザインしてみた。俺の相方の彫師は相当の腕前だよ。首の下から太股の上辺りまで、物語のモチーフを彫ってあるんだけど、下も見たいか？」
「いえ、いいわ。遠慮する」
　浩平は背中を見せたまま小さく笑った。
「そうだよなぁ。体の隅々まで知った仲とは言え、もう人妻なんだから、他の男の下半身は見られないよなぁ」
「馬鹿よね、相変わらず」

　私は彼の戯言を素っ気なくかわし、その代わりに携帯を取り出して、素早く彼の背中をカメラで撮った。シャッター音に驚いて、浩平が振り向く。
「止めろよ、撮るな」
「いいじゃない、ブログに載せたりしないから安心して。版画の参考にさせて貰うわ」
　私は立ち上がって、色々な角度から彼のタトゥーを画像に収めた。
「マーサ、ちょっと変わったな」

　無機質な機械音が、狭い空間に響く。
「そりゃ、変わるわ。人妻だしね」
　浩平が協力的になり、膝立ちして背中側のジーンズのベルトをぐっと押し下げてくれた。お尻の上辺りに、玉座に座るヘロデ王らしき人物の顔が見える。
「お前の顔、綺麗で安心したよ」
　携帯の画面を確認しながら、答える。
「変な顔よ。整いすぎて気味が悪い」
　いきなり浩平が体を捻り、私の腰に両腕を回して引き寄せ、お腹のあたりに自分の顔を埋めた。

「止めて」
「何で？　嫌か？」
声が笑っている。
「あんた、女いるんでしょ？」
　浩平がキョトンとした顔で、私を見上げる。
「何で分かる？」
「分かるわよ」

　彼の肩を押して体を引き離し、ついでに彼の胸元に羽を広げる、翡翠色のハチドリも撮らせて貰った。
「ありがとう。もう着ていいわ」
「やれやれ、何だか嫌な汗をかいた」
　彼は畳の上で丸まっていたシャツを取り上げて頭から被ると、小窓の下あたりに設置してあるインターホンを押して、水になってしまったアイスコーヒーのお代わりを頼んだ。私がアイスティーにシロップを入れて飲んでいると、彼はちょっと畏まって私を見た。

「結局、俺は許して貰えたんだろうか？」
「さっきも言ったけど、もういいのよ。私、もうそんな昔の事にこだわって、時間を無駄にするのが嫌なの。ところで、私が以前自費出版した版画集が有るんだけど見てくれる？」
　私はポートフォリオを開いて、本や原画、最近のデッサン用ノートなどを座卓の上に広げて、浩平に意見を求めた。
「へぇ。結構ちゃんと続けてたんだ。サイトで見るより、やっぱり現物見たほうがいいよな……。煙草吸っていい？」
「駄目。紙モノの上で煙草なんて吸わないで」
「はいはい」

　私と彼の関係は、いつの間にか学生時代に戻ったような遠慮の無いフランクなものになった。そこには恋愛感情は無いけれど、その方が清々しく分かりやすい。最近の作品も見せると、彼は無言で小刻みに頷きながら、薄いあご髭を手でこすっている。
「うん……、マチエール感は俺好みだ。銅版画の手法については、俺は何とも言えないけどさ、強いて言うと……マーサの絵は一寸ツメが甘いんだよ」
「そう？」
「エロならもっとエロにした方がいいし、可愛くしたいならそれを突き詰めた方がいい。両方詰めてもいいけど、どっちもまだ吹っ切れてないよな。このままだと、小ぎれいな凡庸作家で終わっちやうぜ」
「そっか……」
「作風を決めて、その線を徹底的に極めた方がいい」
「うん」

　凡庸という言葉がキリキリと胸に突き刺さった。キツイ批評ではあるが、浩平の言うことはもっともだ。私はまだ自分のスタイルを決めかねている。
「悪いとは言ってないよ。センスは昔から良かったし、デッサン力は向上してると思う。ここまで基礎固めがしっかり出来てるんなら、もっと思いっきり暴れてみたら？」
「そうねぇ」

　額に手を当てて考えこんでいると、あの若いウェイターが浩平のアイスコーヒーを持って来た。慌てて座卓の上を片付けると、彼は目を輝かせて私の版画を見つめている。空いたグラスを下げ、お冷やを継ぎ足しながら目は版画に釘付けだ。
「スゴイ綺麗ですね。お二人はアーティストなんですか？」
　浩平と私が目を合わせて苦笑する。
「そんなんじゃないよ。趣味程度さ」
　にこやかな顔で伝票に追加分を書き足しながら、彼は盛んにスゴイスゴイと言って去って行った。

「あいつロリコンかもよ」
　浩平が私の版画の一枚を指さして笑う。それは、まだ成長途中の少女が全裸でベッドに寝そべり、手鏡で己の肢体を観察している作品だ。鏡の中にも彼女の身体が映っているという、ちょっと扇情的な一枚で、自分でも気に入っている。

「私、新しい作品集を作ろうと構想を練っているところなの」
「ほう、それはいいね。どんなテーマ？」
「刺青男の皮を剥いで、本の装幀に使う話」
「うはっ、それは吹っ切れてる」
　浩平は笑いながらアイスコーヒーにシロップを入れた。

「俺が死んだら、皮を剥いでもいいよ。マーサに全部あげるから、作品集の装幀に使えよ」
「要らないわよ、あんたの皮なんて。色々汚れてるだろうから触りたくない」
「ひっどい事言うね」
　それから彼は両手を後ろに付き、くだけた格好で座卓から離れて、私の顔をしげしげと眺めた。
「マーサの妖精は元気？」
　馴れ馴れしく訳知り顔で言う彼に、私は少しムッとした。

「主人がレーザーで消したがってるわ」
「何とまぁ、芸術の分からない無粋な男だな。何でそんなのと結婚したんだ？　俺はお前を見ていると……」
　目を細めて私を眺める彼の身体から、暗い熱気がじわりと滲み出る。
「お前は本当に色が白いよな。絶対タトゥーが映える肌だよ。その背中に何か彫らせてくれないかなぁ？」
「そんな巫山戯た事を言うなら、主人に言いつけて生皮剥いであげるわ」

　キッと睨みつけた私に、彼は頭を下げた。
「悪い、調子に乗った」
「どうせ、色んな女の子に甘い事言って、練習させて貰ってるんでしょ？」
　私は座卓の上の私物をまとめてポートフォリオの中にしまい、薄くなったアイスティーを飲み干した。
「もう行くね。意見を聞かせてくれてありがとう。お茶くらい、奢ってくれるのよね？」
「勿論。今日は来てくれてありがとう。本当に……済まなかった」
「ご馳走様」

　私は靴を履き、彼の方を見ずに手を振って別れた。私の背中に、メールするよ、と彼が声を掛けたが、私は振り返らず、また急な木の階段を下りてカフェを後にした。路上に出ると、残暑の日差しはいよいよ厳しく、私は日傘を持って来なかった事を後悔したが、浩平との再会には満足していた。数年来、私を縛り付けていた重たい鎖が外れたのだ。

　それはきっと浩平も同じだろう。でも、もう会わない方がいいと思う。せっかく再会し、関係を修復出来たのは嬉しいし、共通の話題で話が出来るのは楽しい。絵についての意見を聞けるのも貴重な体験だけれど、生き方の方向性に違いを感じる。多分彼はこのまま破天荒な生き方を貫くだろう。それはそれで彼らしくていいけれど、それに巻き込まれたら、きっと私は自分を見失う。

　私は、あの人と別れて良かったんだと思うと同時に、漂流するかのごとく自分の好きに生き、その辿り着いた場所で特異な才能を放つ様を見て、羨ましくなったのかもしれない。様々な想いが溢れて私の心を掻き乱し、何とか落ち着かせていた感情の器はグラグラと揺れだした。
――自分らしくいられないのは、もう嫌だ。人形みたいな自分は嫌だ。人に生かされるだけの自分なんて嫌だ！

　私の目に突然涙が溢れ、地下鉄駅に向かう足取りはいつしか小走りになった。人目を避けて、地下鉄駅に降りる階段の踊り場で立ち止まり、汗と一緒に、頬に流れた涙をハンカチで拭った。新品の淡いピンク色のハンカチが、ベージュのファンデーションで汚れたのを見て、余計やり切れない気持ちになったが、呼吸を整えてゆっくりと階段を下るうちに、私の気持ちは落ち着いてきた。どういう訳だかこの夏、私は少し情緒不安定で、自分でも呆れてしまう。

　時間は丁度お昼を少し過ぎたくらいで、改札を抜けて構内に入ると、少し空腹を感じた。今日は早く帰る必要も無いし、何処かでお昼を食べ、買い物でもしてから帰ろうと思う。
　そうだ、あの画材店の上の喫茶店に行こう。あそこならそんなに込まないし、置いてある美術雑誌を読みながら時間も潰せる。もしかしたら、隣のギャラリーでいい展示でもやってるかもしれない。私は地下鉄に乗って、目当ての画材店に向かった。

　先日久しぶりに篠田さんと訪れた喫茶店は、お昼という時間帯もあってそれなりに賑わっていたが、丁度良く壁側の二人掛けのテーブル席が空いたので、そこに掛けた。ウェイトレスにエビピラフのセットを頼み、バッグからノートを取り出し、忘れない内に浩平に言われた事を書き込んだ。

――詰めが甘い、もっと、暴れろ。作風を決めて線を極めろ。凡庸。
　私は自分が冗談で浩平に言ったセリフを思い出す。
――刺青男の皮を剥いで本の装幀に使う話
　体中に彫られた絵のような刺青、私の腰にひっそりと息づく幼い妖精……。私の胸の中で一匹の蚕が頭をもたげ、己の揺り篭を作るために、白い光沢を持った細い糸を吐き始めた。このか細い絹の糸を取り出し、私は美しい夢幻の布を織ろうと思う。

　喫茶店で昼食を済ませた後も、私は二時間ほど長居してノートに構想を書き散らした。お店にしてみれば迷惑な客だとは思うけれど、沸き上がって来る物語の流れを中断したくなかったのだ。私はそこで、短い物語を一つ書き上げた。

　これで行こう。これを叩き台にして絵を描こう。文章の細かい部分は、絵に合わせて推敲すればいい。喫茶店を出た後に雑貨屋さんや書店を回って、家に帰った時はもう日も傾き暗くなりかけていた。買い物してきたものをリビングのテーブルに並べてひと心地つき、バッグから携帯を取り出すと、メールが一件届いている。

　それは夫からで、例の温泉旅行の日程が決まった事と、宿泊予約を入れた旅館の名前が記載してあり、ネットで旅館までのアクセス方法と、周辺の施設などを調べておいてくれと書いてあった。日程は随分急で、明後日の土曜から月曜までの二泊三日だ。そう遠出するわけではないし、温泉に行くだけなので、準備にさほど手間は掛からないが、ちょっと突然だなと憂鬱になる。彼の都合で、土曜の午後に出発して、月曜の午前中には帰らなければならないので、二泊三日とは言え、慌ただしい旅行だ。

　時期を一ヶ月遅らせてくれれば紅葉が綺麗なのにと思いながらも、その旅館は独身時代ならとても泊まれそうにない老舗の高級旅館なので、気持ちを良い方へ切り替えた。この街から車で一時間ほど行った所に在る、三方を山に囲まれた温泉街は、中心に大きくうねった川を抱く複雑な地形のおかげで、風景にバラエティがある。週末なので混雑するかもしれないが、たまには豊かな自然を眺めながら、のんびりお湯に浸かるのもいい。
　それに、人の多く集まる場所は人間観察に都合が良いし、温泉ともなれば、裸の人達を存分に見る事が出来る良い機会だ。この際だから、作品の参考にさせて貰おう。出来る事なら、一人でスケッチブックと創作ノートを持って、温泉宿に長逗留してみたいものだけど。

　私は普段着に着替えてから、自分の部屋へ行ってパソコンを起動させ、夫が知らせてきた旅館のサイトをネットでチェックし、そこまでの行き方を調べた。予約すれば駅から出る送迎バスに乗れるようだが、彼はそういう団体行動を毛嫌いするので、自分で運転して行くのだろうと思い、旅館のアクセス案内のページとその周辺の地図をプリントした。後はカーナビが何とかしてくれるだろう。
　私も運転免許は持っているが、あの事故以来車の運転はしていないので、今ではすっかりペーパードライバーだ。夫が大事にしている黒塗りのセダンで、運転の練習をする気には到底なれない。

パソコンとプリンターを動かしてしまったので、私はついでに浩平のタトゥーもプリントしようと思い、携帯をパソコンに繋いで画像をフォルダにコピーした。私はその数枚の画像の中から、サロメがヨカナーンの首を載せた盆を掲げている場面と、ハチドリのタトゥーの二枚をプリントし、創作用ノートに挟んで保存しておく。

彼の絵は私にとって、とても魅力的なので、あまり長く視つめ過ぎると、影響を受けそうで怖い。オリジナリティこそが創作の要なのだ。私は浩平に言われた言葉を、ポスト・イットに書き写し、デスクに置いたカレンダーの隅に貼り付けた。忘れないよう目に付く所に置いて、自分への戒めにしたい。スケッチブックを広げ、最近まで描いていたラフの事は忘れ、今日書き上げた物語をイメージしながら新たな絵を描いていく。

――しかし言葉に縛られてはいけない。小さくまとまらないように、タブーを恐れずに……。
私は創作ノートに手書きした物語から連想される、たくさんのシーンを夢想した。登場人物は、少女と詩人、その妻と、そして悪魔。彼らの造形に熱中し、空腹に気が付いて顔を上げた時、時計はもう夜の八時を過ぎていた。

私はデスクの上をそのままにして、キッチンへ行き、冷凍庫の中から冷食のマカロニグラタンを取り出した。今夜はかなり涼しいし、これとコーヒーで済ませてしまおうか。コーヒーメーカーに粉と水をセットし、グラタンのパッケージを剥がして電子レンジに入れる。とても簡単、調理に十分、食事に十分。片付けを入れても三十分もあれば済んでしまう、一人だけの夕食。私は毎日こんなのでも構わないんだけど。

食卓テーブルに置いたままだった今日の新聞を読んでいるうちに、電子レンジがメロディを奏でて調理の終了を知らせてくれた。コーヒーサーバーからマグカップにコーヒーを注ぎ、熱々のグラタンを取り出して皿に載せ、トレイに並べて食卓へ運ぶ。フォークに刺した火傷しそうなマカロニを、冷ましながら口に運ぶと、結構美味しい。

そう言えば、篠田さんって独身で彼女もいないって言ってたけど、いつもどんなもの食べてるんだろう？
やっぱりコンビニ弁当とか外食なんだろうか。でも、あの人って職人肌の凝り性だから、意外と自分で出汁を取って、本格的なお味噌汁とか作るのかもしれない。私はその様子を想像すると何だか微笑ましく、一人マカロニをつつきながら笑ってしまった。

ピアノの調律師は自分でもピアノを弾くし、バイオリン作りの職人も、当然自分でバイオリンを弾く。装幀の職人は、自分で本を書かないのかしら？

考えてみると、私は自分の事は篠田さんにあれこれ話したが、篠田さんの事は良く知らない。知っている事と言えば、市内の会社で総務係長をしている、黒いセルのメガネを掛けた、中肉中背の三十代独身男性。日中は会社勤めをこなし、夜と休みの日には、本の装幀というマイナーな趣味に没頭している。一見、温厚で真面目、感じの良い話しやすいタイプで、特に美男子ではないけれど好男子。あまりお喋りではなく、静かに話す聞き上手……。あの人の印象は、ざっとこんなところだろうか。

少々地味目というくらいで、不思議と悪い所が見つからないのに、ずっと独りでいるという事は、自分の世界に他人を招き入れず、また他人の世界にも足を踏み込みたくない人なのかもしれない。そういう気持ちは解らないでもないけど、寂しくなったりしないんだろうか。
――私も変な女って思われてるんだろうな……。

冷めて食べやすくなったグラタンをさっさと平らげ、コーヒーを飲んで一息ついた。夫が戻るのは深夜零時を過ぎるだろう。シャワーでも浴びてから続きを描こうと思い、私は飲みかけのカップをそのままにして、空いたグラタンの容器を片付けた。

深夜一時近くになった時、玄関のインターホンが鳴って私は飛び上がった。集中して何かをしている時、あの音には本当に驚かされる。夫だろうと思いながら、インターホンに付いている確認パネルを見ると、案の定酔って眠そうな顔をした彼の姿が、小さな液晶画面に映っている。私はドアを開けて、彼を迎え入れた。フラフラとリビングまで進むと、彼は鞄を床に置き、もどかしそうに上着を脱いだ。

「今日はもう、眠くて立ってられない。すぐ寝るからね」
そう言うと、歯も磨かずに寝室へ行ってしまった。彼の脱いだ上着を持って寝室へ行くと、ネクタイやズボンなども床に脱ぎ捨てられ、彼は下着だけでベッドに大の字で寝そべり、既にいびきをかいている。きっと帰りのタクシーの中でも、ほとんど寝ていたのだろう。
私は床に散らばった衣服を片付けてから、彼の重たい体の下から掛け布団を引き抜き、冷えないよう体に掛けてあげた。私もそろそろ寝ようと思ったが、お酒の匂いを体中から発散させている彼の横で眠る気にはなれないので、私は作業部屋を片付けてから、二階の客間に行って布団を敷き、目覚まし時計をセットして床についた。

真っ暗な部屋で一人、しばらくの間、目を開けて天井を見つめていた。
目が見ているのは暗い天井板の柾目だが、私の脳は記憶の中の幻を視せてくれる。今、私が視ているのは浩平の背中に彫られたサロメのハイライトシーンだが、本物と違って鮮やかな色彩を放っていた。場面は、サロメがその赤い小さな唇を少し開き、ゆっくりとヨカナーンの唇に重ねるところだ。彼女の周囲には、暗い色調ながら匂い立つような花々が咲き乱れ、黒い揚羽蝶が鱗粉を振り撒きながらヒラヒラと舞っている。まだ幼さの残る彼女の横顔は、残酷な悦びに上気し、うっすらと淫らな笑みを浮べていた。

彼女は死んだ男の唇に口づけする時、決して目を瞑らないだろう。自分を袖にした男を、今、彼女は自分の支配下に置いているのだ。虐げられた男の顔を、彼女はじっと観察しているはず。だから、この傲慢な娘は目を瞑らない。そして、死んだ男の唇がもう開かず、彼の舌を自分の舌で絡め取れない事を悔しく思っているに違いない。

サロメには強烈なインパクトがある。私も、私のイメージをもって、人の情念や業を描いて行きたい。浩平も、風変わりな表現方法を選んでいるけれど、真っ直ぐ自分の描きたいものを描いているじゃないか。私も彼に引けを取らないようなものを描きたい。創りたい。もしかすると、その為には今手にしている様々なものを失う事になるかもしれないが、それでもいいと思う。
私がどんな生活をしようと、どれだけ歳を取ろうと、一生やり続けたいと思うことはこれしか無いと、私は今、明確に自覚したのだ。もう後戻りは出来ない。軽い興奮と夢想の中で、私はゆっくりと眠りに落ち

て行った。

　翌朝、夫はいつも通りの時間にきちんと起きてきた。プロ意識の高い人なので、どんなに遅くまで飲んでも、次の日の仕事に差し支えるような飲み方はしない。朝の身だしなみを整え、食卓につく時には、いつでも出掛けられるように、すっかり準備が出来ている。
　仕事に行く時の隙のなさと、帰宅した時のだらしなさとのギャップに、結婚当初は戸惑ったものだ。朝食は、休みの時以外は和食と決められているので、私はお味噌汁とご飯、主菜の他、何か小鉢一品と漬物、常備菜を出すよう心掛けている。お味噌汁も、ちゃんと鰹節で出汁を取り、具も二品は入れてくれというのが、彼の希望だ。口が肥えているので、出汁入りの味噌などで誤魔化したら、すぐばれるに違いない。

　ダイニングテーブルの上に、湯気の立つご飯茶碗や汁椀が並べられるのを持って、彼が私に聞いた。
「昨日、メール送ったんだけど読んだ？」
「あ、旅行の件ね。読みました。旅館までの地図とか、プリントしておいたから」
「読んだら読んだって、返事くれない？　伝わってないのかと心配になるでしょ」
　不満気な言い方に、私は少し慌てた。
「御免なさい。プリントとかしてたら忘れちゃって……」
「今日も少し遅くなるので、準備の方は任せるから。明日は昼まで病院にいなきゃいけないので、一時くらいには戻るよ。食事して着替えたら、すぐ車で出掛けるから、そのつもりでいてよ」
「はい。分かりました」

　夫は私が少し沈んだのを気にしたのか、患者に対するように愛想の良い笑顔を浮かべ、箸を取って食事を始めながら言った。
「予約の取れた部屋は、すごくいいんだよ。二間あってね、奥の部屋のベランダは広いウッドデッキで、プライベートの露天風呂が付いているんだ。見晴らしもいいそうだよ」
「へぇ、それは素敵ね」
「そうだろ？　気が向いた時に、いつでも温泉に浸かれるなんていいだろ？」

　上機嫌の夫に相槌を打ち、私も朝食に箸を付けた。夫を送り出して洗い物と掃除を済ませたら、旅行の準備をしよう。先にそれを片付け、落ち着いてから、またスケッチブックに向かいたい。明日からの旅行を心待ちにしている夫には申し訳ないが、私の頭の中は、自分の作品をどうするかで一杯だった。

　土曜日は快晴で、風も涼しく絶好の行楽日和だった。週明けには天気が崩れると予報で聞いたが、何とか月曜の午前中までもって貰いたい。午後になると、夫はいそいそと仕事から帰宅し、楽な服装に着替え、用意しておいたサンドウィッチで軽い昼食を済ませると、私を急かせて車にスーツケースを詰め込んだ。

割と快適に走れる市内を抜けると、温泉街に至る山道は一本しかなく、ここに向かう車の目的地はみな同じだ。温泉街の入り口とも言えるトンネルを前にして、急に道は込み出した。車は一列になって道を埋め尽くし、徐行並のノロノロ運転で進むしかない。夫はハンドルを右手で軽く支えたまま、左手でポケットからガムを取り出し噛み始めた。単調な運転に飽きてきたようだ。

「やっぱり土曜日は込むねぇ」
「そうね。こんな繁忙期に、突然お部屋が取れたのが不思議だわ」
「旅行代理店の営業に頼んでおいたら、急ですが週末に一部屋キャンセルが出たからどうですかって電話が来たんだよ。月曜まで居ていいって言うから、すぐに取って貰ったんだ」
「そう」

通常なら一時間で着く道のりなのだが、やっとトンネルを抜け、ダラダラと蛇行する川沿いの細い坂道を慎重に上り、山の麓の老舗旅館に着いた時には、既に家を出てから三時間が過ぎていた。正面玄関に乗り付けて、車止めに駐車させると、すぐさま若い男性従業員が現れ、車から荷物を下ろすのを手伝ってくれる。私は彼にスーツケースを任せ、周りを見渡して旅館の全体像を眺めた。

後ろにこんもりとした緑の山を頂いた、大きな門構えの古い旅館は、この地方には珍しい、黒瓦の美しい三階建ての和風建築で、黒塗りの塀で囲まれ重厚な様子だ。玄関のすぐ脇には、うねった形の大きな赤松が一本、主のように生えて枝を天に伸ばしていた。その向こうには小さな池がしつらえられ、玩具のように可愛らしい赤い太鼓橋が掛けられている。多分、池の中には色とりどりの錦鯉が優雅に泳いでいるのだろう。

私達は玄関で若女将達の丁寧な歓迎の挨拶を受け、チエックインの手続きをしてから、三階にある見晴らしの良い部屋に案内された。外観や内装は純和風で古風だが、エレベーターやトイレなどはモダンで機能的なデザインが美しい。
さほど贅沢に興味は無いが、滅多に入ることの出来ない高級旅館の、磨き抜かれた木の廊下や、精密に彫られた鳳凰の欄間、花の絵が描かれた格子天井といった造形に囲まれていると、その素晴らしさに心が踊る。勿論、丁寧で細やかな心配りも嬉しいものだ。

私達の部屋は和室の二間で、八畳の居間と六畳の寝室が、丹頂鶴と松を描いた襖で分けられている。二人には十分な広さだ。居間の床の間には、九谷焼らしい華やかな壺に、桔梗や楓など、秋を感じさせる花などが良いバランスで生けられていた。掛軸はお目出度い大黒様の墨絵。
広く取ったテラス窓から見えるのは、低めに重なる緑の山と、その山裾を白い飛沫を上げて流れる、うねった細い川ばかり。薄青い空は既に暮れかけ、たなびく雲は茜色に染まって、薄いブルーとオレンジ色の微妙なグラデーションに目を奪われる。

寝室側は夫が言った通り、テラス窓の外が屋根付きの広いウッドデッキになっており、そこに黒い陶器で出来ているらしい、丸い湯船が半分ほどの深さまで埋めこまれていた。

ウッドデッキの隣室側は、それぞれが高い塀で囲まれ、他の客室からは見えないように設計されている。正面には低い木の塀が有るが、夜、この湯船に身を沈めたら、きっと空の月と星以外は何も見えないだろう。ウッドデッキの表面に、四角いガラスが幾つか埋め込まれているのが見えるが、多分あれが照明なのだろう。

案内してくれた中居さんが、この時期なら夜十時を過ぎると、頭上に月が輝きとても明るいと教えてくれた。一階には源泉掛け流しの大浴場もあり、そこの露天風呂も素敵だそうだ。私達は、お茶を淹れてくれた中居さんに心付けを渡し、夕食まで時間もあるので、下の露天風呂でも行ってみようと浴衣に着替えた。

タオルなどを持ちエレベーターで一階に降りると、すぐ前の壁に、大浴場を案内する木の看板が掲げてある。案内板に従って、華やかな柄のカーペットを敷き詰めた廊下を歩いていると、向かいからお風呂上りらしい、浴衣姿の女性三人連れが歩いてきた。一番先頭にいるのは、濡れた髪をアップにまとめた、四十代くらいの背の高い、少しきつめだが華やかな顔立ちの女性で、その後ろを三十代くらいの元気そうな女性二人が、笑いながら付き従っている。

一見して、女性の上司に部下が二人と言った様子だ。突然夫が喉の奥で、うっと小さな声を上げ、向こうから来る先頭の女性も、口を小さく「あ」の字に開いたまま、彼の顔を見つめて立ち止まった。後ろにいる女性二人は、不審気に前の女性の様子を伺っている。

どうしたのかと夫の顔を見ると、彼は硬い表情のまま彼女とすれ違う時に軽く目礼し、そのまま無言で大浴場へ向かって歩いて行く。彼女もまた、素知らぬ顔をして目を伏せた。私達は、三十分を目処に上がることを約束し、それぞれ男女別の浴場に分かれて暖簾をくぐったが、私は脱衣所で浴衣を脱ぎながら、さっきの女性は誰なのだろうと考えていた。

こういうこじんまりした旅館は、大型の温泉ホテルと違ってお風呂が大混雑しないのが有り難い。私は洗い場でさっと体を洗うと、早速タオルを持って、大きな岩で周りを囲った露天風呂に体を沈めた。
お湯はぬる目で少し白濁していて「美肌の湯」と文字の彫られた、木で出来た立て看板がある。私の他には年配の母娘らしい二人連れがいるだけで、彼女達はそれぞれの持病と通っている病院について、小声で話し合っていた。聞こえるのは彼女達の微かな声と、お湯の流れる音だけと言う、静かで落ち着いた空間に、ゆったりと和む。

私は刻一刻と暮れなずむ夕空を眺めながら、白いお湯に肩まで浸かり、さっきの女性の事を考えていたが、もしかしたらあれは、夫の別れた妻なのではないかと思い至った。
私は彼女の顔を知らないが、大手のエステサロンで店長をしていると聞いていた。さっきすれ違った彼女とその連れも、何となくエステシャンという雰囲気がある。別に嫉妬心などは起こらず、ああ、そうかと思っただけだが、夫とあの人がキチンとした服装をして、高級レストランのテーブルにでも向かい合わせで座っていたら、さぞかし似合いのカップルだろうと変な納得をしていた。

顔にじんわりと浮いてきた汗をタオルで拭っていると、端っこにいた母子がお風呂から上がろうと水音を立てた。何となしにその二人に目をやると、白髪の七十代くらいかと思われる痩せた母親の方が、びっくりするほど大きな張りのある白い乳房を二つ揺らしていた。
私は内心、うわっと声を上げ、失礼な事にその胸を凝視してしまったのだが、その人の娘らしき五十代ほどの女性は、それ相応の様子だったので、余計驚かされる。
自分のはしたなさに気付き、慌てて目線をずらして横を向いたが、私はすっかり暗くなった露天風呂の中で、何をどうすると、あんな大きさと形を保てるのだろう、女とは不思議な生き物だなぁと、他人事のように感心していた。

洗い場に戻って髪を洗い、屋内の湯船にも少し浸かってから脱衣所に上がると、後ろで誰かがイレズミがどうとか小声で囁いているのが耳に入った。私の事かと思うが気にしない。
体を拭いて浴衣を着、濡れた髪をまとめて浴場を出ると、既に上がっていたらしい夫が、入り口にしつらえられた休憩所の木のベンチに座ってサービスの麦茶を飲んでいた。私の顔を見ると紙コップをゴミ箱に捨てて立ち上がり、行こうかと声を掛けてきた。部屋に戻る道すがら、さっきの背の高い女性は前の奥さんかと聞くと、彼は驚いたように目を見開いて私を見た。

「何で分ったの？」
「何となく。雰囲気とか、二人の緊張感とか」
「おお、女の勘は怖いね。……多分、職場の慰安旅行か何かだろう。あの業界は、まだまだ元気らしいよ」
「ふぅん」
それっきり、彼女について話す事は無かった。夫は、また彼女とばったり会って、気まずい思いをするのが嫌なのか、豪華な夕食を楽しんだ後、もう大浴場には行かないと言い、寝る前に部屋の露天風呂に入るのを楽しみにしていた。私も誘われたが、夜になると昼間の男女の浴場が入れ替えになるので、そちらにも入りたいと言い訳して、私は夜の十時過ぎ、一人で大浴場へ出掛けた。一人の方が時間を気にせず長風呂出来るし、あの部屋の小さな湯船に二人で入るのは、どうも気が乗らない。

日中、男湯だった浴場は、夜になると赤い女湯の暖簾が掛けられ、脱衣所の中は昼間よりも少し混雑していた。私はさっとお湯を浴びると、真っ直ぐ露天風呂に至るガラス戸を開けて屋外へ出、間接照明で照らされた瓢箪型の岩風呂に、ゆっくり足から浸っていった。周囲は板塀で囲まれ、その向こうは竹林になっている。昼間のお湯より心持ち温度が高いようだが、夜風が涼しいので丁度良い。

湯気でかすむ中、私は頭の上にタオルを載せ、背中を大きな岩にもたれさせて頭上を見上げた。雲の少ない良く晴れた晩で、満月から少し欠けた月が煌々と夜空を照らしている。何人かの泊まり客が、三々五々無言でお湯に浸かっているが、旅館の性質のせいか全体に年齢層が高い。私のような二十代の客は、他に泊まっていないのかもしれない。

来る前は、人間観察をしようと思っていたが、今はただぼんやりしていたくなり、目を瞑ってお湯に浸かっていると、体の周りのお湯が大きく揺らいで、すぐ近くに誰か来たことが分った。

目を開けて波が来た方を見ると、私はドキリとした。例の女性が、私のすぐ横にいたのだ。私の方を見て、遠慮がちに微笑んでいるが、その両の目は暗い輝きを帯びている。間近で見る彼女の顔は、綺麗だが、何だかツルリとして作り物じみていた。
「今晩は」
「……今晩は」
　私は応えながら、反射的にタオルを持った手で顔の傷を隠した。
「突然で御免なさい。生方さんの奥様……でしょう？」
「は、はぁ……」

　奥様と言う名称は、貴女の方が相応しいと思いながら、私がはっきりしない返事をすると、彼女はいかにもサービス業のプロらしい見事な笑顔を作った。
「そうだと思いました。失礼ですが、私の事、何かお聞きですか？」
　演技かと思うような、その完璧な態度と声音に、何となくチリチリとした嫌な刺激を感じ、また曖昧に、はぁと答えた。わざわざ私を見つけて、そんな事を聞いてくる気が知れない。

「そうですか。私達、明日の午前中にはチェックアウトしますから、ご安心下さいね」
　そう言うと私に向かって軽く会釈し、ごゆっくりとつぶやいて、サラブレッドのように引き締まった肢体もあらわに屋内の浴場へと戻って行った。私はぼんやりとお湯に浸かりながら、何だか狐にでも化かされたような変な気持ちになった。

――何が安心なんだろう。あの人、私に自分の姿を見せつけに来たのかしら……。
　お風呂から部屋に戻って、夫に露天風呂であった出来事を話すと、彼は呆れたような顔をして、気にするなとだけ言った。そして今日は疲れたからと、寝室に敷かれたフカフカの布団に潜り込み、すぐに休んでしまったので、私も身の回りを片付け、持ってきた創作ノートに、今日あった事や感じた事をメモしてから床についた。

　翌日はゆっくり起きて部屋で朝食を頂き、その後出掛けて、近くに在る神社へ参拝し、お蕎麦の美味しい店に行くなどするうち、あっという間に日が暮れた。山の上は街より寒く、秋どころか初冬かと思うような冷たい風に震え上がり、熱い温泉で温まりたくなる。

　旅館に戻ると、前の妻と顔を会わせる心配がなくなったせいか、夫は嬉々として一階の大浴場へゆき、私は逆に部屋付けの小さな黒い浴槽にお湯を溜めて入ってみた。しかし、一人で外のお風呂に入るというのは、思ったより心細い。勿体無いが、体が温まって汗が流れ出したところで、私は早々にバスタオルを取り上げ、体に巻いて部屋へ戻った。
　暗い夜空は昨日と比べると雲が厚く、吹きつける風が湿っぽい。これは、雨が近いのかもしれない。

　私の予想は当たり、夕食を済ませた後、ホテルのバーで夫の晩酌に付き合っていると、バラバラと雨粒が窓を叩き始めた。その後、凄い勢いで風が吹きだし、ごうごうと鳴る風の音と、土砂降りの雨音は凄まじく、古い木造旅館はギシギシと家鳴りし、建物が心配になるほどの暴風雨だ。バーで飲んでいた他の宿泊客も、この宿潰れないだろうね、などと話している。

「天気予報では、明日の朝には晴れるって言ってたけど、道は大丈夫かしらね」
「大丈夫だろ。台風ってほどじゃないんだし。でも早く寝て、明日に備えた方がいいかもな」
　私達は、いつもより早い時間に布団に入って休む事にした。外は相変わらずの嵐だが、夫は寝付きが良い方なので、すぐに寝息を立てて熟睡してしまった。私はなかなか寝付かれない方だ。仰向けで布団に潜り、唸るような風の音を聞きながら、ただじっと目を瞑って心身が休まるのを待つうちに、昨日会ったあの人、夫の前妻の姿が思い出される。

　夫は、しばらく別居した後の円満離婚だと言っていたが、実情は良く知らない。仕事が忙しい上に遊び好きで、家の事はほとんどハウスキーパーに任せ、子供も欲しがらなかった人だと聞いた。私の脳裏に浮かぶ、あの人の顔。つるりとした、張りのある瓜実顔に感じた違和感……。アンドロイドを思わせる、作り物じみた印象。左右対称の顔のパーツ……。

　私はハッとして隣に寝ている夫の横顔を見つめた。ああ！　きっと彼女もそうなんだ。彼女の顔もこの人が作ったんだ！　その答えは、私にとって天啓のように閃いた。
　もし彼女が私に敵意を持ったとしたら、それは私がこの人の妻になった為ではなく、彼が私に作った、この顔が妬ましかったのかもしれない。それが真実かどうかは分からないが、もしそうなら、彼女の事を少し可哀想に思う。私は自分の顔を、理想に近づけたくて手術を受けたわけじゃない。ただ崩れた形を元通りに復元する過程で、彼の好みの顔に近づけられただけなのだ。

　こんな顔……。私は両手で顔を覆って隠した。もし私が、隣で眠っている男の事を愛しているなら、この顔も好きになれるはずじゃないの？　いつもの堂々巡りが始まる。私は考えるのを止め、布団の中に深く潜って眠るように努めた。

　朝方目が覚めると嵐は既に収まり、青空は見えないものの風も無く、穏やかな天気だった。夫は午後から病院に顔を出さなければいけないので、ゆっくりはしていられない。
　朝食を済ませると、私達は慌ただしく帰り支度を始めた。大した量では無いが、二人分の着替えや、夫の職場に配るお土産、身の回り品をスーツケースに詰め、私の創作ノートも入れようとした時、私はうっかり手を滑らせてノートを取り落とした。

　そのノートの間からするりと薄い紙が二枚飛び出し畳に散ったのを、夫が屈んで一枚拾い上げる。
　私はゾッとして、全身に冷たい汗が吹き出した。夫はその紙をじっと見つめ、そして冷ややかな声で言った。
「これ、何？」

　彼が私に見せたそれは、浩平の背中を飾るタトゥーをプリントアウトしたものだ。心臓の鼓動が早くなり、ドキドキと自分の耳を打つ。私は震える小さな声で答えた。
「……サロメ」
「そんな事を聞いてるんじゃない！　これは誰の背中だ？」
「谷崎浩平……」
　夫は苛立たしげにもう一枚の紙も拾い、それらを乱暴に破いて丸めると、叩きこむようにゴミ箱に放り込んだ。その荒々しい音と態度が、私の神経を傷めつける。

「会っているのか？」
「先日、一度だけ。謝罪したいって連絡があって……」
「謝罪の為に服まで脱いでくれるのか？　ああ、話は帰ってからだ。この忙しいのに全く！」
　頭に血の上った夫が、射るような目で私を睨みつけジャケットに腕を通す。私も無言でノートをしまい、スーツケースとバッグを持ち、彼に続いて部屋を出た。車で山を下りると、温泉街から街へと向かう国道は、月曜の午前中という事もあり空いていて走りやすい。雨は上がっているが、路面を水が覆って黒々としているのにも構わず、不機嫌な夫の運転は飛ばし気味で終始無言だった。

　私は助手席に硬くなって座ったまま、ずっと考え事をしていた。自らの迂闊さが招いた不和ではあるが、やましい事をしたわけでもないし、もし、きちんと説明をしても夫が解ってくれなかったら、その時はもうそれでいいとさえ思う。

　私は車窓に目をやり、薄い鼠色一色のどろりとした空を眺めた。早いもので、もう一ヶ月もすれば雪が降りだすだろう。私が、垂れこめた雲の下、こんもりと円く重なる山の稜線を目に焼き付けようとじっと見ていると、何か白いものが三つ、空を飛んでいるのが目に入った。前に一つ、後ろに二つ。徐々に大きくなり形を明確にした、その三つの白いものは、羽を大きく広げて低空飛行する白鳥達だった。私は慌てて窓に顔をくっつけ、車の頭上を斜めに横切って行く白鳥を良く見ようと体を捻った。

　実際に空を飛ぶ白鳥を見るのは生まれて初めてだ。翼を広げた白鳥は、想像以上に大きい。時折、大きく翼を動かして、ゆったりと空を飛んでいる姿は、優雅と言うより、渡り鳥らしい逞しさの方が際立っている。夫は、隣に座っている私が座席の上でジタバタしているのを、怪訝そうに横目で睨んでいたが、浩平の件がよっぽど気に触っているのか、何も言わない。私も無言ながら、胸の内は子供のようにはしゃいでいた。野生の白鳥が空を飛ぶ姿を見られた事が、この旅行で一番楽しい思い出となり、彼らの強く美しい姿は私を慰め、そして勇気づけてくれた。

　家に帰ると夫はキビキビとスーツに着替え、仕事用の鞄と、お土産のお菓子を持ち、まだエンジンが冷えてもいない車を走らせて職場へ向かった。一人で家に取り残された私は、スーツケースを開いて汚れ物を洗濯機に放り込み、荷物を片付ける。

　いつもの日常に戻らなきゃ……。そう思いながらも、夫が仕事から戻って来た後の事を考えると憂鬱で、家事をする気にもなれず、私は自室に行き、溜まっているかもしれないメールを確認する為にパソコンを立ち上げた。幾つかのジャンクメールの他に、谷崎浩平からのメールも混じっていた。内容は簡単な挨拶で、先日会った事の礼と、今後の活躍を期待するという通り一遍のものだった。

私はざっと目を通すと、それを完全に削除した。そしてもう一通、意外な事に、篠田さんからのメールが届いていた。こちらも、ごく短いメールで、画像を添付した自作のブックカバーの紹介と、寒くなってきたので体に気を付けてというシンプルな内容だ。古い着物の生地で作られたブックカバーの優しく手に馴染む風合いが、画像からも伝わってくる。

――篠田さんとお茶を飲みながら、絵と本の話でもしたい……。
私はそのメールに簡単な感想を添えて返信すると、ソフトを終了させて電源を落とした。昼間なのに、どんよりと外が暗いせいで夕方のような気分だ。私はスケッチブックを取り出して、今朝見た白鳥の飛翔する姿を鉛筆で描き始めた。

これを物語のモチーフに入れようか？　いえ、それはちょっと唐突で不自然。前のページを開いて、他のキャラクターやモチーフを確認する。描いたキャラクターの顔を少し描き変える。体の線も少し変更。もっとリアルに、もっと強く。線を単純にして引き立たせる。
没頭して鉛筆を動かすうちに、私は昨日、今日にあった嫌な出来事を全て忘れた。そうだ、こうしていられれば、私はいつも幸福なのだ。

夜の街

　週末に真麻さんへメールを送ったのは、特に何か意味があったわけではない。彼女も忙しいだろうし、作業をせっつくような事はしたくないが、あまり連絡を取らずにいて疎遠になるのもどうかと思い、時候の挨拶かたがた、コミュニケーションだけは取っておこうと考えたのだ。彼女から何がしかの相談や連絡があれば、僕も会って話す機会を持てるが、僕から彼女を誘うのは、やはり迷惑だろう。
――大人になると、友達を作るのも一苦労だな……。

　週明け、出勤すると突然、上司に呼ばれて取引先の社長夫婦の観光案内を仰せつかり、僕は営業部の新藤課長に付いて、運転手として市内各所を走らされた。月末が近づいて営業も忙しいらしく、中間管理職の僕にお呼びがかかったわけだが、僕の仕事も滞るのでたまったものでは無い。
　普段は乗らない社用車のハンドルを握り、課長を助手席、六十代くらいの社長夫婦を後部座席に乗せ、薄曇りの空の下、観光地やビール園だのを周ったのだが、課長は彼らと一緒にビールを飲み上機嫌で冗談を飛ばして盛り上げ、僕はしらふで恭しく課長に付き従い、あれこれ顧客に気配りをして、つつがなく旅行を楽しませる黒子の役割だ。

夕食で、たっぷりビールを飲み、肉も散々食べた後だというのに、お喋り好きで飲み食いの好きな社長夫人は、宿泊先とは別のホテルに在る、有名なバーに行きたいと言い出した。僕が新藤課長の顔を伺うと、彼は、ああ、いいですね、あそこから見る夜景が素晴らしい、今ならまだ空いている時間だから早速行きましょうとご機嫌だ。本心は分からないが、営業課長がここで顧客を放り出すわけがない。

　僕は、いつになったら開放して貰えるのだろうと思いつつ、愛想笑いを浮かべていたのだが、意外な事に旦那さんの社長の方が、もうホテルに戻って休みたいと言い出した。恰幅の良い赤ら顔の社長は、その体格のせいか膝が悪く、歩くのがしんどいようだ。しかし奥様は折れる事はなく、それならあなたは運転手さんにホテルへ送って貰えばいいわ。私は新藤さんと飲みに行くから、と屈託が無い。僕が再び課長に目をやると、彼は仕方がないという顔をして、社長さんをホテルに送ってから帰れと言った。

「では、このまま車に乗って帰っていいんですね」
「おお、明日、会社に乗って来い。飛ばして警察に捕まるなよ」
「大丈夫です。では、お先に失礼します」
　僕は社長を市内の高級ホテルまで送り、彼がフロントで鍵を受け取ったところで失礼した。ホテルのドアマンに挨拶をして、僕には似つかわしくない黒塗りのセダンに再び乗り込み、車をゆっくり発進させた。

たまに運転すると疲れる。しかも、接待なんて肩がこる。車は特に好きじゃないが、僕の運転は丁寧で安全運転だと会社の上司に褒められた事がある。今日、運転手をさせられたのは、多分そのせいだろう。宮下もそうだが、営業マンには車好きで、かつ運転の荒い男が多い。新藤課長も、深夜なら一般道を百キロ近く出すという噂だ。あまり送迎向きとは言えない。

　繁華街を一本外れた道を選ぶと、道幅は狭いが車はスムーズに流れる。社用車で何かあってはまずいので、僕は真っ直ぐ帰ろうと、シャッターの下りた古い商店が並ぶ通りをゆっくり走った。街灯が少なくて

暗いので、自転車でも飛び出してきたら大変なのだ。夜も九時を過ぎ、ほとんどの店は閉めているものの、ところどころ灯りのついたショー・ウインドウが、暗い道をうっすらと照らしていて、返ってうら寂しい。そのショー・ウインドウの一つ、古い洋装店か何かの前に、白っぽい服を来た若い女性が一人、ぽつんと立って中を覗き込んでいた。

　腿くらいまでの丈の長い半袖のブラウスに細身のジーンズ、紙袋とバッグを持って、ほわっとしたショー・ウインドウの黄色い明かりに照らされている姿は、何だか古い映画のワンシーンみたいだ。こんな所をこんな時間に、若い女性が一人でウィンドウショッピングなんて変だなぁと思いながら、その女性の顔が見えるくらいまで近づいた時、僕は速度を落として、そっと彼女のすぐ近くに車を止めた。

　彼女の目線を追うと、その先には、髪も顔も真っ白で、目鼻の描かれていない、のっぺらぼうのマネキンが、ポーズを取っていた。車に気づいた彼女が、ちょっと怯えた目をして僕の方を振り返ると、それは見覚えのある白く端正な顔だった。寒そうに、むき出しの腕をさすりながら、硬い表情で身構えている。
「真麻さん？」
　窓を開けて声を掛けると、ハッとした彼女が恐る恐る近づいて来た。

「……ああ、篠田さん。びっくりした。この車、篠田さんの？」
　僕はハザードを点けて車から降り、真麻さんの前に立った。
「いえ、社用車なんです。ちょっと仕事で使って、今日はこのまま帰るところ」
「そうなんですか。この車、主人が乗ってるのと同じなので、びっくりしちゃった」
「へぇ、同じ車種なんだ。あの、真麻さん、どこかへ行くところですか？」
　彼女は少し答えに困ったようで、恥ずかしそうに目を伏せて言った。

「何となく出てきちゃって……ウロウロしてました」
「出てきたって……お家から？」
　ちょっと意味が分からない。
「主人に怒られるのかなぁって思ったら、何だか嫌で、出てきてしまいました……」
　僕は、にわかには状況が飲み込めなかったが、冷たい秋風の吹く夜に薄着では寒いだろうと、取りあえず車に乗るよう勧めて助手席のドアを開けた。大人しくシートに座った彼女の足元に置かれた紙袋には、スケッチブックやノートなどが入っていて、それを見た僕は、ようやく彼女が衝動的に家出をしてきたのだと理解した。

「ここで路駐しているとまずいので、少し動かしますね」
　運転席に戻った僕は、営業時間が終わって正面玄関前がガラ空きになっているビルの前まで車を走らせ、そこに車を寄せて停めることにした。サイドブレーキをかけ改めて真麻さんの顔を見ると、いつにも増して寂しげだ。以前、喫茶店で話した時、彼女の孤独感を感じるうち、自分の心まで水に浸かったように冷え冷えとしてきたことを思い出す。

「あの……僕が口を出すような事ではないと思うけど、どうしたの？　ご主人、すごく怒ってるの？」
「もしかしたら、もうそんなに怒っていないかもしれませんが……。でも、何だか考えれば考えるほど、もう駄目だって気がして、あの人が帰宅する前に逃げてきちゃった」
　自嘲気味に言う彼女は案外と落ち着いていて、僕は少し安心したが、暗い車の中、ぼんやりと前を見つめているその顔には深い絶望が垣間見えた。

「そう……、お家に帰りたくないとなると、真麻さん、ご実家は市内？」
「ええ、でも今は実家に行きたい気分でもないし」
「そうか、そうだねぇ……」
　僕は頭をかきながら考えた。良識から考えれば、家に送ってあげて、ご主人と仲直りを薦めるべきなのだろうが、どうも聡美ちゃんの時とは全く状況が違うらしく、判断が付かない。泣くわけでもなく怒るわけでもなく、悲しんでいるのとも少し違う。自ら、静謐で孤独な世界に自分を追い込んでいるような、そんな彼女を見ていると何だか痛々しく、僕の胸の片隅で、邪な考えが小さなあぶくとなり膨れ上がる。

「結婚前にお付き合いしていた人と、先日一度だけ会ったんですが、それを主人に知られて……」
「ああ、それで」
　彼女の人生の一部を知る度に、僕は僅かなショックを受けるのだ。僕の中のあぶくは、音も立てずにすっと消えた。
「その人も絵を描くので、私の作品について意見を聞きたかっただけなんです。でも夫に説明する前に怒ってしまって」
「それは無理も無いと思うけど、ちゃんと話せば解ってくれるんじゃないかな。逃げないで話してみたら？」
「解ってくれるのかな……。表面上はそうかもしれないけど、結局、私達、何にも解り合えない気がするんです」
「解り合うって難しいよ……皆んな何とか努力して、折り合い付けるんだろうね。ご主人、真麻さんのこと自由にさせてくれているみたいだし、大事に思ってるんじゃないかな」

　僕の言ったセリフは、如何にも良識的で分別の有る慰めだったが、そんな言葉が今の彼女には役に立たない事を僕にも分っていた。しかし、僕が彼女の内面に潜む問題に踏み込んだところで、何の解決にもならず、逆に問題をこじらせるだけかもしれない。僕は、そういう関係になるのを意識的に避けるのが、いつの間にか習い性になっている。僕の方を見た彼女の顔は、通りすぎる車のヘッドライトに照らされて瞬間美しく浮かび上がり、その輝く瞳は少し笑っていた。

「大事でしょうね、きっと。私にもあの人は大事ですし。でも、お互い愛情は無いのかもしれない」
　彼女は意味深長なことを言うと、左手の薬指にはめたプラチナの指輪を、右手の指でくるくると回した。元からサイズが合わないのか、彼女の指が痩せたのか、するりと抜けて落ちそうなくらい、それはゆるく簡単に回る。僕がただぼんやり彼女の細い指を見つめていると、彼女も自分の指を見つめたまま話しを続けた。

「私、狡いんです。条件が良くて楽そうだから結婚したんです。だから上手くいくように、あの人の前だと、借りてきた猫みたいに大人しいんですよ。あの人は何と言うか……理想が高くて。だから、未だに素の自分なんて見せたことないんです」
　彼女の自虐的な言葉がどこまで真実か分からないが、僕は彼女の「素」という部分に興味を持った。
「素の君はどんな人？」
「我が儘で、雑で、理屈っぽい、家事が嫌いな、芸術家気取りの馬鹿女……かなぁ」
「ははっ、それは卑下し過ぎだよ」
　僕が笑ったのに釣られたのか、彼女も少し笑顔を見せてから、あっと小さな声を上げた。

「メール、読みました。いいですね、あの和柄のブックカバー。売り物ですか？」
「ああ、あれはね、母親のリクエスト。たまに、何か作れって古い布なんかを送り付けてくるんだ。もう叔母と母が使ってるんじゃないかな」
「そっかぁ、ちょっと欲しかったなぁ」

　リラックスしたのか彼女の口ぶりが若い女性らしくくだけて、何となく嬉しくもあったが、同時に僕は、暗く狭い車内に二人っきりでいるのが、そろそろ落ち着かなくなってきた。
「ブックカバーなら、また作るよ。真麻さん、やっぱり今日のところは帰ったほうがいいね。住所はどこ？」
　有無を言わさぬ僕の言葉に、彼女は小さくため息を吐き、ゆっくりした口調で住所を教えてくれた。そこは少し郊外寄りにある、欧米風の一戸建てが立ち並ぶ高級住宅街だ。

「済みません。まさか篠田さんに、こんなご迷惑をお掛けする事になるとは思いませんでした」
「迷惑ってほどの事じゃないから、気にしなくていいよ。でも……」
　僕は車を発進させながら、彼女のむき出しの腕をちらりと目の隅で見ながら言った。
「今度、家出する時は、もっと計画的にした方がいいかもね。風邪引くよ」
「そうですね。もう寒いし……実は、あんまりお金も持ってなかったんです。携帯はバッテリーが切れてるし、最悪」
「スケッチブックは持って来たのに？」
「だから、馬鹿なんですよ、私」

　そう言って笑う彼女は、もう孤独の海の中に沈み込んでいる淋しい女ではなかった。僕はカーステレオのスイッチを入れ、誰かが入れっぱなしにしていたクラシックの CD を流しながら、郊外へと車を走らせた。夜のドライブは、街を抜けてしまえば車も少なく気楽なものだ。真麻さんは疲れたのか、シートに深く座って眠そうな顔をしている。彼女はさっき、結婚相手とはお互い愛情が無いかもしれないと言っていたが、どうしてそう思うのだろう。まだ結婚二年目の若く美しい妻のことを、大事には思っても愛さない夫とは、一体どういう人物なのだろうか。

　目を瞑ってしまった真麻さんをそのままにして、二十分ほど車を走らせると、次第に広く敷地を取った瀟洒な住宅地に侵入していた。噂には聞いていたが来るのは初めてで、想像以上に大きな邸宅や、変わったデザインの個人住宅が立ち並び、独特のデザインを施された街灯が、外国じみたレンガの道を青白く照らしている。僕は住所表示を確認しながら、大体の所までゆっくり車を進めて、真麻さんに声をかけると、彼女は慌てて目を開き、周りをキョロキョロと見回した。

「この道を、もう少し行った先の十字路を左折すれば、すぐ見えてくるんですが。あの……家の前じゃなくていいので」
「うん、分かったよ」
　普通の乗用車に乗って帰ってきたところをご主人に見咎められたら、また厄介な事になるかもしれないなと思い、僕は教えて貰ったとおり、左折してすぐに車を左に寄せて停めた。

「この辺でいい？」
「あ、いいです。ありがとうございます。あのコンクリート塀で囲まれた黒い家なんです」
通りの二三軒先に、どっしりとした高い灰色の塀で囲まれた、黒い大きな二階建ての家が見えた。その黒い壁には、スリットの様に細長い窓が幾つか穿たれ、そこから白い明かりが漏れている。僕はこういう黒い家を見る度に、要塞や秘密研究所のような暗い目的を連想してしまい、あんまり感心しなかったのだが、真麻さんの家は正に灰色と黒の要塞のようだった。こんな豪邸に二人きりか……。ここに彼女を連れ帰ってしまった事を、僕はほんの少し後悔した。

「じゃぁ、また……」
　そう言った僕に、彼女は笑顔を向けてドアを開けようとしたが、ふと動きを止めて何か考えている。
「どうしたの？」
「あの、篠田さん、ちょっとお願いしていいですか」
「うん、何？」

　それは意外な頼みだったが、大した事ではないので快く引き受けると、彼女は礼を言って車を降り、手を振ってコンクリートの塀の中へ入っていった。夏物のブラウスが仄白く闇に滲んで消えるのを見送り、僕は念の為、ライトを消してその場に十分ほど駐車していたが、彼女が出て来る様子もないので、静かに車をUターンさせ、その街を後にした。

　静まり返った夜の住宅地を抜け、再び繁華な通りを越えて、自分の住む街へと車を走らせると、空はこの時間になってようやく晴れ渡り、群青の夜空に星が瞬いていた。不思議なもので、家で寛いでいる時よりも、歩いている時とか運転している時の方が、集中して物事を考えるのに向いているらしい。特に夜は、周囲の刺激が少ないせいか、内省するのに丁度良い。

――まずいなぁ……。これはどうもまずい。
　今まで、なるべく遠くに押しやっていたぼんやりした考えが、急速に形を整え、胸の中一杯に膨れ上がって息苦しいほどだ。それは不安と怖れを伴いながら、熱く密度の高い塊になりつつあった。
　僕は彼女のことが好きなんだ……。

　宮下夫婦の揉め事に関わって、不倫の泥沼などもう沢山だというのに、助手席に彼女を乗せて走っていた時、僕の心はさわさわと浮かれていた。真麻さんに惹かれている自分の気持は、もう誤魔化しようがない。そして、彼女がさっきまで座っていた助手席の足元には、スケッチブックやノートが入った紙袋が置いたままだ。これをしばらく預かってくれ、というのが彼女の頼みだった。真麻さんのご主人は、彼女の創作に反対なのだろうか。作風が嫌なのか、それとも別の理由なのか……。

　アパートに着くと、時間が遅いせいか来客用の駐車スペースが一つ空いていたので、そこに車を滑り込ませる。もし空いていなかったら、近所のコインパーキングに入れて、歩いて戻らなければならないのでホッとした。助手席の下から、真麻さんの紙袋を取り上げると、ふわりと女性の甘い匂いが漂い、僕はその香りに引き寄せられてしばらく動けなくなった。

真麻さんの姿が思い出され、また僕の胸の中で何かが泡立つ。香りが消えたところで、ようやく僕は紙袋と自分の鞄を持って車から降りた。まずい、まずいよなぁ、と小さく独り言を言いながら。
自分の部屋に入って荷物を置くと、気持ちを落ち着ける為、すぐにシャワーを浴びてパジャマに着替えた。
パソコンを立ち上げてメールチェックをすると、家出する前に送ったらしい真麻さんからのメールが一通届いていて、ブックカバーの感想と、またお茶でも飲みたいですねと、一般的な社交辞令が書かれていた。僕は濡れた髪をタオルで拭きながら、しばらくそのメールの文面を眺めていた。

多分、彼女は僕の事をどうとも思っていない。その上、今は元彼の事でご主人と揉めている真っ最中だ。彼女の為にも、しばらくの間、連絡は控えておいた方がいいだろうと思う。考えても仕方ないし、もう寝てしまおうかと思った時、足元に置いた紙袋に気が付いた。真麻さんのスケッチブックと創作ノート……見てもいいだろうか。

いずれ完成したら、嫌でも見ることになるのだから、構わないんじゃないか。僕はそっとスケッチブックとノートを紙袋から出してデスクに置いた。他人の秘密を盗み見るような気がして、心臓の鼓動が少なからず早くなる。

まずはスケッチブックの表紙をめくる。紙面いっぱいに鉛筆でラフデッサンが描き込まれていて、ところどころにメモ書きも有るが、棒線で消され、また書き直され、まだ全体の構成がまとまっていない事が伺える。そんな調子の鉛筆画が二三ページに渡って紙面を埋め尽くしていたが、その後突然画風が変わった。僕はその絵を見て、陳腐な表現だが、正に鳥肌が立った。描かれているのは、前のページと変わらず鉛筆によるラフデッサンだが、線が一気に力強くなった。
彼女の絵には、若い女性らしい可愛らしさがあったのだが、それが全く感じられず、描かれている男女の姿には、見るものを慄然とさせる圧倒的な凄みが有る。

美しいが怖い。剥き出しの裸体は、もはやエロティックではなかった。それは、ただただ、人間の生の姿でしかない。甘さなど微塵も感じさせない情念の世界が、画面いっぱいに展開されている。
これは凄い……。急に、一体どうしたんだろう？　こんなに変わるものなのか？

これらの絵には、鉛筆によるラフだからこその勢いが有った。これを版画に起こす時、また違うマチエールと線になるが故に、受け取るイメージもまた異なるだろう。だが、しかし、これは凄い。これは間違いなく本物になると確信出来る。僕は興奮して、次々にページをめくった。どれもこれも、そのまま切り抜いて額に入れたいくらいの完成度だった。

人の本気は、傍らにいる他人にも影響を与える。真麻さんのか弱い体の中に潜む、強靭な作家性を目の当たりにし、その絵から発せられる波動に、僕は共振し奮い立った。この作品を一冊の本にするなら、作品の強さに負けず、かつ美しく引き立たせるような装幀にしなければいけない。彼女の本気を、趣味の範疇の手仕事で包むわけにはいかない。僕も、この装幀を本気でやらなければ。それが出来ないのなら、彼女の本気を愚弄することになる……。

この夜から僕の頭の中は、真麻さんの本を飾る装幀の事で一杯になった。毎日仕事から帰ると、僕は真

麻さんのスケッチブックと創作ノートに目を通し、彼女の創りだそうとしている世界観と登場人物に思いを馳せた。そして、これらのイメージに合う装幀の素材をネットなどで探して、頭の中で色々組み合わせてみる。僕の中で、幾つかのデザインパターンは出来つつあるが、肝心の作品が出来ない事には、これ以上前に進めない。

　この頃、丁度仕事も忙しく、連日夜の十一時くらいまで残業をした後の作業だったので、毎日寝不足気味ではあったが、気持ちが充実しているせいか、疲れはほとんど感じなかった。

決意

　ある晩、久しぶりに七時頃仕事が終わり、帰ろうとタイムカードを押していると、後ろから宮下に声を掛けられた。
「お、篠田係長も上がりか？」
「ああ、お疲れ。久しぶりに早く帰れるわ」
「お前、帰っても食うもの無いんだろ。居酒屋でも寄っていかないか？」
「僕はいいけど、家で食べないのか？」
「まぁ、一、二時間くらいならいいだろ。行こうぜ」

　宮下もタイムカードを押すと、僕の肩をポンと叩き、先に立って職場を出た。外に出ると、湿った秋風が体に吹きつけて急激に寒くなり、そろそろスーツだけでは心許ない季節になったのを感じる。閑散としたオフィス街を抜け、地下鉄駅近くの雑居ビルの中にある、どちらかと言うと年配のサラリーマン達が集う、大衆居酒屋の暖簾をくぐった。

　店の中は焼き魚や焼き鳥の匂いが充満し、うっすら白く煙っている。混雑している店内を縫って現れた、作務衣を着た小太りの中年女性が、元気よく、いらっしゃいませ、お二人様ですかと聞きながら、僕達を小さな小上がりに案内してくれた。早速、オシボリとお通しがテーブルに並べられ、僕達は生ビールとつまみを幾つか注文する。

「俺、もうオサレな店とか行く気しねぇんだよ。女の子もいらねぇから気楽に飲みたい」
　膝を崩し、オシボリで手を拭きながら言う宮下に、僕は苦笑した。
「お前、キャバクラ大好きだったのになぁ。ところで、もうイザコザの方は収まったのか？」
「まぁ、何とかな」
　お通しのスモークサーモンを箸でつつきながら俯いている宮下の顔は、心なしかやつれて見える。

「落ち着いたなら良かった……」
　店員がビールのジョッキと焼き鳥などを持って現れたので、僕らは話しを中断し、お約束通りジョッキを合わせて、お疲れさんとお互いを労った。僕はたまにしか酒を飲まないが、久しぶりに飲む冷えたビールは旨かった。宮下は喉を鳴らし、一気に半分ほどジョッキを空けた。
「あぁ、うめぇ！」
「お前と割り勘にすると、凄く損なことを思い出した」
「いいじゃねぇか、お前は独身貴族なんだから。俺なんか扶養家族三人に、家のローンまで抱えてるんだぞ」
「それはそれで幸せじゃないか」
「まぁなぁ……」

　熱々の鳥串を一本手に取り、硬めに焼き締まった塩味の鶏肉を噛むと、肉汁が溢れて滋味深く、これもなかなか旨い。たまにはこういう食事も良いものだと思っていると、宮下が考え考えといった様子で話しだした。
「お前さぁ、あの……あの件について、どの程度知ってんの？」

「あの件？」
　宮下が真顔になり、さかんに右手で頬の辺りをこすっている。
「アレだよ。俺とあの女の事。どの程度噂になってたんだ？　同じ課の連中に聞くわけにもいかないしさ」
「お前も、言いづらい事を聞くなぁ……噂は、そうだなぁ。最初は、彼女がお前にベタベタするのが目に余るとか、多分、出来てるんだろうとか……」
「うん」
「それから……彼女が休んで、お前が部長に呼び出された後、まぁ、どうも彼女がお前の家に突撃したらしい、とかなんとか……」
「はぁ……それから？」
　宮下は腕を組んで、がっくり項垂れている。

「後は知らん。彼女が玉砕して会社を辞めて終わりだろう？　まさか、まだ続いてるのか？」
「いや、別れたよ。それはマジ。俺だって狡いのは分ってるけど、離婚するつもりはないんだ」
　そう言ってビールの残りを空け、店員に空のジョッキを振って見せた。
　ありがとうございます、生お一つ！　店員が叫ぶ。
「聡美ちゃん、怒ってないのか？」
「怒ったさ。怒るわ、泣くわ、別居話も出た。今は何とか落ち着いたけど、流石にもう頭が上がらない。次、揉めたらアウトだな」
「そんな他人事みたいに」

　自嘲気味に笑いながら宮下が焼き鳥に手を伸ばし、僕は刺身の盛り合わせに箸を付けた。
「聡美、お前に相談してたんだろう？」
　僕は内心どきりとし、鮪の赤身を口に入れようとしていた箸が止まる。宮下が平然とした顔で焼き鳥を食べているのを見て、僕は小さな秘密を暴露し、大きな秘密を隠す事にした。
「一度、電話があった。お前が会社の女の子と出て行ったって……」
「ああ、あん時な。そうか」
「ちょっとパニックになってたぞ」
「ふふ、俺だってだよ」
　宮下の前に新しいビールのジョッキが置かれて、彼はまたすぐ、半分ほどを飲み干した。
「あいつ、昔お前のこと好きだったらしいぞ」
「え？」

　僕の脳裏に、あの夜の事が蘇る。暗い車内で濡れたように光る聡美ちゃんの瞳、ゆっくり近づいて来る薄く開いた唇……。でも、あれはもう夢だと思いたい。
「お前、そういう所トロイからなぁ。今、気になる女はいないのか？」
「……いるよ」
　宮下の顔が、悪戯好きの中学生みたいに輝いた。
「ええ？　いるのか？　何だ、どこまで進んでる？」
「何にも。ただ知ってる人ってだけだ」
「何モタモタしてるんだよ。子供じゃないんだから、さっさとやる事やって、結婚しちまえよ」
「そんな簡単に行くか」
「何でだよ？　もしかして、結婚出来ない相手か？」
　楽しそうな顔をして矢継ぎ早に質問する宮下が何だか可笑しかったが、事の次第を話すつもりは無い。

「僕の問題だよ」
「お前の問題って何だよ？」
　僕は泡の消えたビールを一口飲んでから、少しだけ気持ちを吐露する事にした。

「会社、辞めるかもしれない」
「え？」
「すぐってわけじゃないけど、今の内に金貯めて、来年か……その辺りには。だから、駄目だな」
　宮下は僕を凝視したまま黙り込んだ。話が突然で飲み込めないのだろう。ふっと気が付いたようになって、僕ににじり寄ってきた。
「辞めるって何で？　家の事情か？　病気とかじゃないよな」
「いや、やりたい事が有るんだよ。だからさ、もうそっちの方に本気出さなきゃいけないんだ。」
「やりたい事って何だよ？」
「それは教えられない」
　ニッと笑った僕は、きっと小学生のようなふざけた顔をしていたのだろう。宮下は呆れた顔をして、こう言った。
「ガキかお前は？！　ちょっと、おねぇさん、このあんちゃんに、生一つ！」
　真麻さんからメールで連絡が来たのは、僕がスケッチブック類を預かって十日ほど経ってからだった。いつかの夜の事と、連絡が遅くなった事を詫び、週末に時間が取れるようなら会って預けたものを返して欲しいという内容だ。僕は、都合はそちらに合わせるのでお渡ししますと返信し、今度会う時に見せると約束した、装幀された彼女の本と、手持ちの古布で作った和柄のブックカバーを、彼女から預かった紙袋に入れて準備した。

　そして、自分のサイトを少し作り直す事にした。今までは趣味の範囲で作った物の備忘録程度でしかなかったが、もっと人に見て貰えるよう、興味を惹くように作り変えなければならない。僕はまだ会社員なので、大っぴらに副業として装幀の仕事をするのは差し障りがあるが、こういう趣味の人達と知り合い繋がりを持つ事が、将来何かしらのプラスにならないとも限らない。ネット上ではなく、どこかリアルな場所で自分の作品を人に見て貰い、また他人の作品に触れる必要性も感じている。

　装幀以外にも、古書の修繕に興味があるので勉強したいし、考えれば考えるほど、やらなければならない事がどんどん増えてくる。なぜなら、僕はルリユールを趣味ではなく本業にするのだから。
　僕がずっと、この先どうしようかと考えていた仕事についての決心を付けさせてくれたのは、真麻さんの作品だ。僕には彼女ほどの才能は無いかもしれない。もしかすると、世間的には負け犬になるのかもしれない。

　それでも、一度しかない人生なのだから、自分の思いに賭けてみようと僕は決心したのだ。一年くらいかけて徐々にプロへとシフトし、それから完全な独立が目標だ。贅沢をしなければ、取りあえず三年は貯金で食べて行けるだろう。
　こんな状況じゃ結婚どころではないが、それだって別にいいじゃないか。僕が今、惚れている女は、どうせ他人の妻なんだし、裕福で地位もある旦那から奪うなんて、僕には到底無理だ。

　結局、真麻さんとの待ち合わせは土曜の午前中になった。場所は最初に会った時と同じ、老舗の喫茶店だ。あそこはテーブルが広いし、静かで良い。待ち合わせ当日、以前にも増して気持ちが落ち着かない。そわそわと時間を気にして急ぐさまは、まるで高校生の初デートだ。喫茶店に向かって、人混みを避けながら繁華街を歩いていると、すれ違う人々の服装が、すっかり秋の装いに変わっているのに気が付いた。

――今年の夏は、ちょっと面白かったな。
　そんな事を考えながら歩いている内、目当ての喫茶店に着いた。中は相変わらず時が止まったように、昭和の雰囲気が濃く染み付いている。何となく以前に座った席を目で探すと、真麻さんは既にそこに居た。黒っぽい厚地のシャツブラウスにジーンズ姿で、僕の姿を見ると少し腰を浮かせて伸び上がり、微笑んで小さく手を振った。僕も思わず微笑んで、その席に向かい、何だか恥ずかしいような思いを隠して、今日はと挨拶をした。

「今日は。済みません、いつもご面倒ばかりで」
「いえ、全然。気にしないで下さい」
　真麻さんにミルクティーを持って来たウェイトレスにホットコーヒーを頼み、僕は紙袋の中から自分の装幀した本とブックカバーを取り出してテーブルに置いた。
「早速ですが、これがお見せしようと思っていた本で、こっちのブックカバーはプレゼント」
　真麻さんの目が嬉しそうに見開かれ、テーブルの上に乗せられたものに視線が注がれる。
「それとお預かりしていたもの」
テーブル越しに紙袋を渡すと、彼女はペコリと頭を下げてそれを受け取った。

「ありがとうございます。本、見せて頂いていいですか」
「どうぞ、ご遠慮なく」
　彼女は羊皮紙で装幀された自分の本をそっと手に取ると、その感触を愛おしむかのように掌全体で優しく撫でた。そしてゆっくり表紙を開き、遊び紙と本文の対比を眺める。僕は彼女の嬉しそうな顔を見られて満足だった。

「いいですねぇ、素敵です。表紙の手触りがいいわ。革だけじゃなくデザインがシックで、文庫本が一気に稀覯本に変わったって感じ。こんなに立派になるんですねぇ」
「大変身でしょ。こういうのも仕事にしようかなと思ってるんだ」
「ああ、古い傷んだ本とかも、こんな風に蘇ったら嬉しいですよね。あ、ブックカバー、わざわざ作って頂いたんですか？」
「うん。この前、欲しいって言ってたでしょ。あれとは布が違うんだけど、良かったら使って」
「ええ、勿論、ありがとうございます。大事に使わせて頂きます。これ、銘仙ですか？　華やかですねぇ」
「母の趣味で、良く分からないんだけど、古い割にはモダンなデザインだよね」
「素敵です。縫い方も丁寧だし、これを篠田さんが作ってるなんて、凄いなぁ」

　真麻さんがブックカバーを広げて見入っている時、ウェイトレスが静かに近づき、僕のコーヒーを愛想の無い顔で置いて行く。僕はコーヒーに口を付け、気になっていた事を聞いてみた。

「喜んで頂ければ何より。……ところで、こないだの夜は大丈夫だったの？」
　僕の質問に、真麻さんは少し畏まって居住まいを正した。
「本当にあの時はご心配かけて済みませんでした。あの晩、主人とは随分時間をかけて話しあって……実はまだ続いているんですけど、大体結論は出たところです」
「結論って？」
「私、別れようと思って」
「え？　そ、それって離婚って事？」
「はい。主人には申し訳なく思っているんですが、やっぱりもう続けて行くのは無理だなって……」
　淡々と話す真麻さんの顔を、僕は口を半開きにして、穴が空くほど見つめていたに違いない。彼女はちょっと困ったような表情で話しを続けた。

「あの、別に元彼がどうとかと言う事じゃないんです。私の結婚に対する考えが間違っていたって、つくづく思うんですよね。あの人はこのままの生活を続けた方が制作のお金や時間も自由になるし、私の為だって言うんですが、私はあの家に住んで、あの人の妻である限り、何と言うか……頭とか心が制限されて駄目なんです。それで、お金なんか一円も要らないから、兎に角別れて下さいってお願いしているところなんです」

　僕は彼女の言う事が何となく解る気がした。あの要塞のような家を作った男がどんな人間なのかは知らないが、あそこで彼女は、精神的に自由になれなかったのだろう。そして、彼女は自分の魂を、あの箱に閉じ込めておくのに耐えられなくなったのではないか。この人の内面に燃える作家性は、控えめで家庭的であれと期待される妻の姿とは共存出来ないと思う。

「そうなんですか……。で、ご主人はまだ同意していないの？」
「ええ、あの人には、私の気持ちが理解出来ないみたいで。まぁ、そうでしょうね、自分では今度の結婚は順風満帆だと思ってたみたいだし」
「ああ、二回目なんだ？　そうか、男はそういう所、鈍感だからね。しかし、ご主人もショックだろうなぁ」
　僕は、裕福で穏やかな暮らしを楽しんでいた中年の男が、突然若い妻に離婚を切りだされる様子を想像して、少しばかり同情してしまった。だが、真麻さんはちょっと含みの有る微笑を見せて事も無げに言う。

「大丈夫です。あの人には幾らでも好きな女性が作れるんですから」
「へぇ、まぁ、お金持ちで地位もあれば、そんなもんかなぁ。でも、真麻さん、これから大変だね。実家に戻るの？」
「はい、両親には嫌な顔されると思うけど、頭を下げて入れて貰うつもり。家に持って帰る物なんて、あんまり無いから大丈夫だと思うんですけどねぇ。取りあえず、身の回りのものと版画関係のものさえ有れば、何とかなるかなぁって」
「あとはパソコンとか」
　僕の言葉に、真麻さんが笑い出した。

「パソコン、夫に壊されました。それで、しばらくの間、篠田さんにご連絡出来なかったんです」
「パソコンを壊しちゃうの？！　結構荒っぽい事する人だね」
「物の価値が分からない人なんですよ。だから篠田さんにスケッチブックを預けたんです。焼かれたりした

ら嫌だし」

「そのスケッチブック、悪いかなと思ったけど、勝手に見せて貰いました」
　真麻さんの目が輝く。
「どうでした？　私、あれを下書きにして、版の制作に入ろうと思っているんですけど」
「凄いね、震えが来ましたよ。必ず完成させて下さいね。待ってますから」
「はい。必ず。それで、あの……その件でも篠田さんにご相談が有るんですが」
「うん、何でも言って」
「あの、最初にお会いした時には、私も馬鹿で、装幀の金に糸目は付けないぞっていうくらいの気持ちだったんですが」
「うん」
　僕は、話のオチが予想出来て笑えてきた。

「私、今まで働いたことなんて学生時代のバイトくらいなもので、貯金とか本当に無くって……」
「うん」
「それでですね、費用の件なんですが……装幀のお見積もりによっては、分割のお支払いでも構いませんか？」
　遠慮がちに言う彼女の様子が可愛らしく、僕は笑いを噛み殺して言った。
「なるほど。ところで真麻さん、その版画集は何部くらい刷るつもり？」
「そうですね……一応、つてを頼って展覧会で販売しようと思っているので、五十部くらい。あ、装幀は一冊でいいんです。私の宝物にしたいので」
「そう、じゃぁ、その五十部の内、一部を僕に下さい。それを僕の本として装幀したい」
　僕は彼女の前に、人差し指を一本立てて言った。

「それで、チャラ」
　真麻さんはあっけに取られたように、その指先を見つめた。
「いいんですか？　大した価値は無いですよ」
「今は無名でも、将来有名になれば価値は出るでしょ。僕がルリユールの仕事で食い詰めた時は、それを売るから、頑張って良い物作ってよ」
「はい。時間はかかっても、必ず納得いく作品を作ります。待ってて下さい」

　頬を紅潮させて、はっきりと答えた彼女は凛々しく頼もしく、これから只ひたすらに目的地を目指して飛ぼうと武者震いする、血気盛んな渡り鳥のようだった。これが、きっと彼女の本質なんだろう。僕は真麻さんが版画集を完成させるまで、付かず離れず伴走しようと心に決めた。

　その後、彼女の離婚問題は大揉めとは行かないまでも、ご主人が納得されるまで時間がかかり、その間に彼女は実家に戻って制作を続けた。僕達はメールと電話で時折連絡を取りながら、本の造りについて意見を交わしていたが、とうとう道が霜に覆われた初冬の夜、彼女から版画の刷りに入る準備が出来たとメールが来た。

　版画集は一組が十六枚。それを五十部刷るわけだが、そのうち四十八部は、額装も出来るように一枚一枚刷って、別冊でシルクスクリーン印刷した物語の小冊子を添える。この小冊子は彼女が刷ったものを、お母さんと二人で和綴じに装幀するそうだ。残りの二部は製本する為、縦書き右開きに合わせ、右に版画、左に文章がくるよう特別に刷らなければならない。僕は彼女に、版組を間違えないよう気を付けて刷るようにと返信した。

　作業台の上には、僕のサイトを見たという人から預かった本が一冊載っている。それは古い育児日記で、お亡くなりになったお母さんの形見の日記を、やはり形見である古い着物の布で装幀して欲しいという依頼を受けたものだ。以前なら断っていた、こういう依頼や相談を、僕は全て受けるようにしている。流石に教室を開くのは、会社員の身として無理だが、それも今後視野に入れて行きたい。

　一人暮らしの室内は、いよいよ工房と化し、紙やら布やらが増殖し続けている。ここで教室は無理だけどなぁと思っていると、すぐに真麻さんから返信が来た。版組の件が不安なので、見本を作ってみるから確認して欲しい。他にも表紙用の革や紙の見本を見たいという内容だ。確認するのも見せるのも全然構わないが、手持ちの見本を全て持ってどこかで落ち合うのは難しい。僕は少し迷ったが、彼女を自宅に招いてみようかと思った。

――人を招くとなると、掃除をしなけりゃならないなぁ。それに、もう寒いからヒーターの前を片付けておかないと……。
　乱雑に散らかった部屋を見回して少々途方に暮れたが、思い切ってその提案を彼女にメールしてみると、彼女はそれを快諾し、ある晴れた冬の日曜日、青空にハラハラと僅かに雪が舞うお昼頃、彼女は僕の家にやってきた。ドアチャイムが鳴ってドアを開けると、寒さに頬をピンク色に染め、髪を短く切った彼女が、濃い紫色の暖かそうなコートと薄いピンク色のマフラーにくるまれて立っていた。

「今日は」
　笑顔で吐く息が白い。
「今日は。あれ、髪切ったね。イメージチェンジだ」
　僕は彼女にスリッパを薦めて部屋に上がって貰った。今までは栗色のセミロングを真ん中から分けて大人しい印象だったが、今は前髪を短く垂らし、すそを襟足くらいでバッサリ切り、毛先が少しカールしていて、元気な女の子という感じだ。
「ふふ、さっぱりしました。思った以上に首筋が寒いけど」

　肩に乗った小さな雪の欠片を手で払い落とし、楽しそうに笑う彼女は、以前のような人形じみた感じは全く無く、白い肌の下に流れる、温かな血流を感じられそうなほど生き生きしている。
「天気はいいのに寒いね。まぁ、むさ苦しい所だけど、中で暖まって」
「お邪魔します」

「ここ、すぐ分かった？」
「はい、母に車で送って貰ったんです。あの、母から、これ、アップルパイ焼いたので」
「ああ、これはこれは、ありがとう。じゃぁ、後で頂きましょう」

　僕は、前の日に半日かけて片付けた居間に彼女を通し、コートを預かってハンガーに掛け、ダイニングテーブルの椅子を指し示した。
「そこに掛けてて。今、お茶淹れるから。紅茶がいいんだっけ？」
「ありがとうございます。お構いなく」
　僕は鴨居にハンガーを引っ掛けると、台所でカップを温め、ティーパックの紅茶を淹れた。普段紅茶は飲まないので、彼女の為に用意したものだ。

「その辺にある本とか、勝手に見てていいよ」
「あ、ありがとうございます」
　そう言うと彼女は早速立ち上がり、壁際の本棚に並んだ本の背表紙を見つめている。そのうち、装幀について書かれた洋書を取り出して読み始めた。僕は紅茶を淹れながら、彼女が持って来てくれたアップルパイを切り、なるべく綺麗なデザインの皿を探して、その一切れを乗せた。

――デザート用のフォークって、どこだっけ。あんまり来客の無い家は、こういう時困るよな。
　何とか二人分のカップと皿をトレイに載せてテーブルに運ぶと、彼女が済みませんと言って微笑んだ。髪型が変わったせいか、幼くなったような気がする。服装も、薄手の青いセーターにカーキ色のカーゴパンツで、どんどんカジュアルになってきた。
「じゃぁ、お茶飲みながら話そうか。版組の見本、作ったんだね？」
「はい、そうなんですけど……」
　言いながら、彼女がバッグから紙の束を取り出す。
「これで、間違いなく出来てるでしょうか？」

　彼女が手渡した紙の束は、製本する時、ページに乱丁が出ないよう、確認の為に作られた実物大の見本で、版画のイラストと文章、ノンブルが手書きで描き込まれている。版画の質を落としたくないので、この本に関しては両面印刷をせず、紙を二つ折にして製本する為、そんなに難しくはないのだが、万全を期しての事だろう。実際、簡単だと思って手を付けている最中、とんでもない間違いに気づいて全部やり直し、なんて事もあり得るのだ。

　中身は版画が十六頁、テキスト十六頁、タイトル、目次二頁、奥付で全部だ。僕はざっと流れに目を通してみたが、間違いは無くきちんと組まれていた。鉛筆で簡単に描かれたイラストは、それだけでも随分魅力的で、パソコンで取り込み、少し加工すれば、そのまま広告などに使えそうなくらいだ。
「うん、これで間違いは無いけど、解説とか序文なんかは入れなくてもいいの？　ちょっと重厚な感じになるよ」
「いえいえ、そんなおこがましい事。自分用なのに、そこを飾っても仕方無いし」

　彼女は両手で紅茶の入ったカップを持ち、手を温めるようにしながら答えた。その時、彼女の左手薬指に、プラチナの指輪が無いことに気付いて、僕は一瞬ハッとした。
「そうだねぇ、それじゃ、これで大丈夫。じゃぁ装幀のデザインの方も見て貰おうかな」
「はい」

　僕は自分の作業台に置いてある、彼女の作品の為に考えていた装幀のデザインを描いたスケッチブックと、遊び紙や表紙に使う革や金具、栞紐といった細々したものの見本が入った紙箱を持ってテーブルに戻った。
　彼女は僕のスケッチの中から二つほど候補を選び、表紙のデザインについて先に詰める事にした。彼女は表紙のデザインには、かなり自分なりの思い入れがあるようで、僕のスケッチに鉛筆やペンで色々描き込み始めた。しっかりした線と手際の良さを見て、どうもすっかりイメージが出来上がっているようだと、僕は感心しながら彼女の手元を見つめていた。

「流石だねぇ。これはお見事だ」
「我がまま言って済みません。表紙、裏表紙、背表紙は、全体に柄が続く感じで……」
「うん、うん。分かる。それは、版画の中の一枚なんだよね」
「そうです。えっと、八枚目の絵を……こう、この部分を拡大トリミングして入れる感じ。タイトルもここに書きこんでいいですか？」
「うん、書いといて。今パソコン立ち上げるから、タイトルのフォントも今、選んで貰おうかな。実寸でプリントアウトした方が分かりやすいでしょ」

　打ち合わせは、詰めれば詰めるほど細かく話し合いが必要で、気が付くと冬の太陽は低く傾き、空は暮れなずんで、またチラチラと白い雪が舞いだした。僕は部屋の照明を点け、お茶とアップルパイのお代わりを出してから打ち合わせを続け、ようやく大まかなデザインが決定した。
「あの、作者名はどうする？　タイトルみたいに箔押しする？」
「そうですねぇ……。じゃぁローマ字で、これくらい小さく箔押しで」
　そう言って真麻さんが書き込んだアルファベットは、MARSA HIDAKA。
「日高真麻さんなの？」
　僕の問いに、彼女は顔を上げて微笑んだ。

「はい、先日、日高真麻に戻りました」
「そっか……、それじゃぁ、これで文字の金型を発注するからね。この金型はあげるから、後で何かに使えるよ。それと羊皮紙の染めは、見本作って郵送するので、それ見て希望とか意見を言って下さい」
「はい、分かりました」
「真麻さんが刷ったものを送ってくれたら、表紙の見本を作って、僕が仮に組んでみるから、それを真麻さんがチェックして、問題が無ければ作業に入ります」
「はい。わぁ、凄い、こんなオーダーメイド一生に一度ですね」
「さぁね。また機会が有るかもしれないよ。さて、もうすっかり暗くなったけど……良かったら、何処かで晩御飯でもどう？　それともお家でお母さんが待ってるのかな？」
「そうなんです。済みません、私そろそろ帰らないと。今日は長い時間、ありがとうございました」

にこやかにそう言うと、彼女は立ち上がりハンガーからコートを取った。僕はささやかなアプローチを仕掛けたわけだが、あっさりとかわされ、照れ隠しにただニコニコと笑って彼女を送り出した。
「地下鉄駅までの道、分かりますか？」
「大丈夫です。それじゃまた」
「気を付けて、ご馳走様」

　僕は戸口に立って、夕闇の中、ピンクのマフラーを巻きながら地下鉄駅に向かって歩く、彼女の後ろ姿を見送っていた。風の無い夜で、フワフワと無数に空から落ちてくる雪の粒は柔らかで大きく、その一片が僕の肩に落ちた途端にハラリと砕け、一瞬絵に描いたような六角形の雪の結晶の形を見せた。息を止めて、その結晶の形を観察していたが、それはすぐに透明で丸い水滴に形を変えてしまう。
　ドアを閉めて部屋に戻ると、彼女の帰った僕一人の部屋は、何だか今まで以上に殺風景で寂しく思えた。

家族

　私が、あのごく短い家出から戻った夜、夫は意外に優しかった。多分、私が夜になっても家に帰らず、携帯電話も繋がらないことに驚き、あの日の朝に私を怒鳴りつけたせいかと、気を揉んでいたのだろう。ただ、軽々しく昔の恋人と会ったりしないで欲しいとだけ言ったが、その瞳の中に不信の光が暗く宿っているように私は感じた。その時、自分でも思いがけない言葉が唇からこぼれ出たのだった。
「私、離婚したいの」

　その時まで、私は漠然と、このままはっきりした愛情も感じない状態で家族として生きていっていいのだろうかと疑問には思っていた。別れて別の人生を歩むという選択もあるのでは、とも思っていた。しかし、はっきり離婚したいという意思があったわけではない。なのに、どういう訳か夫と真剣に向き合った時、私はこの人と別れなければならない、そうでなければ生きていけない、と強く思ったのだ。

　夫は呆気に取られ、そして怒った。当然だろう。苦労させた覚えも無く、何不自由無い暮らしをさせて来たのに、妻から別れたいと言われれば、理不尽だ、我がままだと腹も立つだろう。精一杯穏やかな声で反論していた彼も、そのうち声を荒らげ、私の作業部屋に乗り込んで浮気の痕跡を探した。そして何も無いと分かると、私のノートパソコンのスイッチを入れ、起動が遅い事に激昂して、テーブルから床に払い落としてしまった。ガシャンという、破滅的な音を立ててフローリングの床に落ちたパソコンは、画面を真っ黒に変えてガリガリと異音を発していた。
作業部屋の入り口に立って、無機質なハードディスクの回転音を聞きながら、肩で息をしている彼の姿を見ていると、どんどん私の気持ちは醒めてきて、今日はもう遅いから明日にしましょうと声を掛け、また客間で一人、寝たのだった。

　その後二週間程、私達は話し合いを続けたが、どうしても話は平行線で噛み合わず、私は自分が行動しなければ何も始まらないのだと悟った。そして、ある晩秋の午後、私は結婚指輪を外してリビングのテーブルに置き、自分の私物共々実家に戻った。両親は私の強硬手段に呆れ果て、生方さんに申し訳ないと頭を抱えたが、私の気持ちが覆らない事だけは理解してくれたようだった。
　私は夫と、別居しながら協議離婚の話し合いを進めていたが、冷え冷えとした空気が透明感を増し、そろそろ本格的に冬支度をしようとする頃、夫から私宛に一通の封筒が届いた。中に入っていたのは必要事項が記入され署名捺印済みの離婚届、それ一枚だけ。合理的な彼は時間と手間を無駄にしない。

　私はその書類に署名捺印すると、バッグとコートを掴み、母に市役所に行って来ると告げて、慌ただしく家を出た。私達の離婚はあっけなく終わり、私は市役所の窓口で手続きを終えると、正面玄関脇を飾っている冬枯れた花壇の前で、冷たく澄んだ空気を胸一杯に吸い込んで深呼吸した。
――終わった！　そして、これから新しく始めるんだ！
　私は急に、街の賑わいの中に身を置きたくなり、その足で繁華街へ遊びに行き、華やかな飾り付けでキラキラしているショッピングモールを目的も無く歩き周った。前倒しのクリスマスセールに突入しているお店は、どこも楽しげな人達で一杯だ。若いカップルが、お互いの冷たい手を温めあうように、しっかり手を繋いで歩いている。

生方さんと、あんな感じだったこと、一回も無かった……。私は家族連れや恋人達を見ているうち、ちょっとだけ淋しい気持ちになった。一緒に買物に行く友達もいない。浩平とはもう終わった。両親にはこれ以上甘えられない。その時、不意にある人の事が頭に浮かんだ。篠田さんに会いたい。あの人なら、私の話を真っ直ぐな目で聞いてくれると思う。ちょっとアドバイスは常識的だけれど、でもあの人と話していると安心するの……。

そんな事を考えていると、目の前に一枚のチラシが差し出された。寒さに震えながら、強張った笑顔を振りまく、チラシ配りの若い女性が気の毒で思わず受け取ると、それは新しく出来た美容室のチラシだった。――髪を切ろう。

　突然、私はそのチラシの美容室へ行き、思いっきり髪を短くしようと決めたのだ。今までは顔の傷が隠せるようにと、長く伸ばしていた前髪を切ってしまおう。自分の顔の皮膚一枚に拘って悩むのは沢山だ。もう十分。私の顔が綺麗だろうと醜かろうと、そんな事はどうでもいい。顔なんて全部晒してやる。そうだ、どうであろうと、私は私なんだから。
家に帰って、さっぱりと短くなった私の髪を見た母は、少し涙ぐんで私の顔を見つめていた。

　心を占めていた大きな懸案が片付き、私は今まで以上に制作に没頭した。実家に居て、母が生活の面倒をみてくれる快適さも手伝い、私は一日二十四時間の中で、好きな時に銅板を彫り、食べたい時に食べ、眠りたい時に寝た。時には眠らず、お風呂にも入らず食事も飛ばし、手や腕は擦り傷だらけで、古い作業着は汚れっぱなしだ。母は私の事を、ケダモノみたいで、とても二十代の女性とは思えないと、顔を合わせれば愚痴を言ったが、私の制作の邪魔をする事はなく、何くれと世話を焼いてくれ、私はしみじみと家族は有り難いものだと心の中で感謝していた。
母に、版画集の構想を話したところ、版画に付ける小冊子の製本を手伝いたいと言い出した。いつの間にか、私が篠田さんから借りたままの装幀の本を読んでいたらしい。

「この和綴じって、工作とか縫い物みたいじゃない？　お母さん、縫い物は得意だし、ほら、昔は千代紙使って箱とか作ってたから、きっと真麻より上手く綴れるよ。一人で五十部作るの大変じゃないの。あんたは版画を刷らなきゃならないんだから、お母さんがこれ、作ってあげる」
「お母さん、趣味のものじゃないんだから、あんまり簡単に考えられても困るわ」
「大丈夫よ。そうだ、今度お華の会で使うご芳名帳を作ってみるわ。それで練習するから大丈夫。もし上手く出来なかったら、その篠田先生に、お母さんも装幀習いに行こうかな」
　楽しげに言う母の言葉を聞いて、私は頬に血が上るのを感じた。

「止めてよ！　篠田先生って言っても、普段は普通の会社員だからお忙しいのよ」
「あら、そうなの？　だからインターネットのサイトに顔写真出してないのねぇ。その人、お仕事任せても大丈夫？　いい人なの？」
「いい人よ。仕事は良心的だし、感じのいい紳士だわ」
「ならいいけど……男の人に変わりはないんだから、あんたもこれからは慎重にね」
「分ってます。じゃぁ、もう制作するから」

　私は、自分の頬の赤みを気にしながら、物で一杯の自分の部屋に戻り、母の申し出を受けようかなと考えていた。シルクスクリーンで写真製版を作り、単色で五十部印刷する。これは案外と簡単だ。体力も使わないし、版さえきちんと出来れば、後は淡々と刷るだけ。しかし、これを手製本するとなると、正直少し憂鬱だった。やって貰おうかな……頼んだら高い紙も買ってくれそう。
　自分の調子の良い考えに苦笑しつつ、作業を始めた。銅版の彫りは大分進み、何枚かは、試し刷りをしながら調子を見ている状況だ。以前考えていた制作スケジュール通りには行かないけれど、今年中に全てを完成させたい。これは「夢」ではなく目的なのだから、曖昧にしたまま年を越したくはない気持ちだった。

　そして、道路の水溜まりが凍り、初雪が降った頃、私の版は出来上がった。私は仕上がった葉書大の銅版を、全部作業台に並べた。こうして見ると、なかなか壮観な眺め。何度も試し刷りを繰り返しては修正を試み、線の強弱で絵の情感を出そうと苦心した。余白のニュアンスも良い感じで出ている。ちょっと前の

私の作品より、ずっと力強く、物語性も深いと自負している。私は試し刷りの紙と見比べながら、よし、これで行こうと腹を括った。
――あ、でも製本用に刷るのは、紙のサイズが違うんだし、文章を入れるんだから、勝手が違う。

私は以前、篠田さんに教わった通り、製本する時の版組の見本を簡単に作ってみた。右に絵、左に文章が来るよう、紙を山折の二つ折にする……。合ってると思うけど……あれ？　違う？　あ、どうしよう、篠田さんに確認して貰おうかしら。
時々、篠田さんにメールを送り、一度は思い切って携帯に電話を掛けて、製本する為の版画をどう刷ったら良いか相談していたが、あまり甘えないようにしようと、私は何となく心に決めていた。離婚したばかりで他の男性と親しげにするのは、自分でもどうかと思うし、私には親しくなった男性に依存する傾向がある。自分のそういうところが、とても嫌になっていたせいもあった。

しかしながら、分からないままで作業を進める訳には行かず、私が思い切って篠田さんに相談のメールを送ると、返信はすぐに来た。見本を持って、自宅兼工房に遊びに来ませんか、と。確かに、街の喫茶店で会うより、篠田さんの家に行った方が、しっかりした打ち合わせが出来るに決まっている。私はすぐに行きますと返事を送った。
そして日曜日、お華のお稽古に行くという母に、篠田さんのアパート近くまで車で送って貰った。車を下りると、空には青空が広がっているが、空気は凍りつきそうに冷えている。透き通った青空のどこからか、フワフワとした大きな雪の欠片が舞い降りてくる。
「じゃぁね、お母さん夕方くらいには家に帰るけど、あんたもあんまり遅くならないように帰りなさいね」
「分ってる。じゃぁ、ありがとね」

四階建てのアパートの二階の端っこの部屋……。メモを見ながら階段を上り、外廊下の奥まで歩いて行くと、グレーのスチールのドアの上に「篠田圭介」と表札の出ている部屋があった。ドアチャイムを押すと、ドアの内側から、はーい、と声が聞こえ、ドアノブがガチャリと音を立てて開き、篠田さんが顔を覗かせた。頬が赤くなるのを感じながら、今日はと挨拶すると、あれ、髪切ったね、イメージチェンジだ、と少し驚いたように篠田さんに言われたのが、何だかとても嬉しかった。

私達は挨拶もそこそこに、製本と装幀についての打ち合わせに時間を掛けたのだが、その時間は、まるで学生時代に戻ったかのように、心が弾み充実していた。いつも自分一人で制作をしていて、それはそれで楽しく幸せな時間なのだが、誰かと一緒に何かを作る事には、また別の楽しさが有る。
そして、私は篠田さんの眼差しが好きだった。私の絵を慈しむような目で見てくれる。そして、勘違いかもしれないけれど、時折私の事も、とても慈しみ深い目で見てくれている気がする。その優しい眼差しを、とても好きだと思った。
打ち合わせの最中、話の流れで離婚した事も言ってしまったが、篠田さんは何も訊かなかった。そういうところも、篠田さんと一緒に居て、気が楽なのだ。仕事も的確で几帳面だし、きっと会社では頼りにされてるのだろう。こういう、手を抜かない職人気質な人は貴重だと思う。

ようやく大体の打ち合わせが済んで、後は私が本の中身を刷ってお渡ししてからと話がまとまった時には、もう時刻は夕方になっていた。冬の日暮れは早い。後三十分もすれば、外は真っ暗になるだろう。せっかく篠田さんが食事に誘ってくれたのに、私は母の言葉を思い出して帰り支度を始めた。
篠田さんは、私が断った事を気にした風もなく、笑顔で見送ってくれたけれど、ところでアップルパイは美味しかったのだろうか？　二切れぺろりと食べてたから、きっと美味しかったのよね。お母さんには、好評だったって言っておこう。

日が暮れて、いよいよ気温は下がり、私は首に巻いたマフラーで顔の下を覆うようにして、足早に地下鉄駅に向かった。ポケットに突っ込んだ両手は冷たくかじかんでいたけれど、私の胸の内は希望に溢れ、熱く華やいで、ちっとも寒くない。目の前に、大きな雪の欠片がふわりと落ちてくる。私は、綿の様な雪の欠片に、はぁっと熱い息を吹きかける。雪は霧のように儚く消えてしまう。雪の儚い姿は悲しくはなく、ただ美しく愉快だった。

翌日から、私は部屋に籠って版画の刷りに入った。こういう作業は、集中して一気にやりたいのだが、小品とはいえ数が多いので、一日で全部仕上げるという訳にはいかない。刷り上がった紙を乾かす場所も無くなってきて、見かねた父が、日曜大工で専用の棚を作ってくれたのが有難かった。父は私の作風が嫌いで、目にする度に眉を顰めていたものだが、今回ばかりは何か手伝いたいと思ってくれたらしい。

結局私が、銅版画と冊子用のテキストを全て刷り終えた時には、篠田さんの家に行ってから二週間も過ぎていた。その十日ほど前に、篠田さんから羊皮紙の色見本が幾つか送られていて、私はその中から、淡褐色とオレンジ色と赤を、霧でけぶるかのように微妙なグラデーションで融合させた一枚を選んだ。
この上に載せるデザインのインクは、あれこれ迷ったが、最終的には黒一色でお願いする事にする。これが一番シンプルで良い。篠田さんは、作品が出来たら宅配で送ってくれれば良いと言っていたが、私は時間が勿体無いので、篠田さんさえ良ければ、直接お家まで届けたいと考えている。お休みの日に、度々お邪魔するのも申し訳ないけれど、訊いてみようかと、夜になって篠田さんにメールしてみたら、意外とあっさり OK の返事が来たので、私は次の土曜日にまた篠田さんのお宅に伺う事にした。

金曜日の夕食後、私が部屋で明日持って行くものをまとめていると、母がふらりと入ってきた。
「何？　どうしたの」
「明日、篠田先生の所に行くのよね？」
母の中では、すっかり篠田先生という名称が定着しているらしい。
「うん、製本して貰う中身を持って行くの」
「じゃぁ、お母さん、真麻の小冊子の装幀を一冊やってみたんだけど、先生に見て貰ってくれない？」
そう言うと、背中の方に隠すように持っていた、例の小冊子を私に手渡した。
「あら、作ってみてくれたの？　へぇー、きれいに出来てるじゃない」

それは薄いグレーと白とサーモンピンクのインクが、大振りにうねったマーブル紙を表紙に使って和綴じされた、私の銅版画集に付ける物語だった。題簽が付いていないのは、どの辺りに貼ればバランスが良いのか考えあぐねたせいだろう。
「失敗したら、また真麻がその紙刷らなきゃならないし、そのマーブル紙も高いしねぇ。確認して貰って、変なところがあったら教えて頂戴。あと、タイトルの位置もね」
「分かった。チェックして貰うね。ありがと」

「先生にお手間ばかり掛けて悪いから、明日はお弁当も作ってあげるわね。また近くまで車で送るから、あんたもちゃんと起きてお化粧くらいしなさいよ」
　そう言うと、母は上機嫌で部屋を出て行った。趣味が出来て、生活にも張りが出たようだ。そのうち、本当に篠田さんに装幀を習いたいなんて言い出しそうで心配。篠田さんは、ずっとこのまま、会社勤めをしながら装幀の腕を磨いて行くのかしら？　一日十時間以上働いているのに、家に帰ってから作業をしたら、睡眠時間を削るしかないのではないか。もしかしたら、ゆっくり食事をする余裕も無いかもしれない。それなのに、私は随分我がままを言っている。せめてものお礼に、私も明日早起きして、お弁当作りを手伝おうかな……。

　その晩は早々にベッドに入り、翌朝、私と母は二段のお重とパウンドケーキを作るのに忙しかった。父が遠足にでも行くのかと訊くと、母は真麻の先生に差し入れするのよ、と言いながら卵焼きを焼いている。
「お前の先生って、大学の時の版画の先生か？」
「違うのよ。ほら、私の版画集を製本装幀してくれる人」
　私はケーキの膨らみ具合を確認しようと、オーブンの中を覗き込みながら答える。
「ああ、装幀な。じゃぁ、版画の方は全部終わったのか？」
「うん、刷り終わったよ。後は、それに添える小冊子を作って、一緒に函に入れれば一応出来上がり」
　父がダイニングテーブルについて新聞を読み始めると、母は手早く父の分の朝食を用意し、出来立ての卵焼きを二切れ皿に載せてテーブルに置いた。
「お父さん、食べちゃってね。真麻と私は後で食べるから」
「うん」
　父は何か言いたそうだったが、その言葉を呑み込むようにして、食事を始めた。

「あら、雪が降ってきた」
　母が台所の窓の方を見て呟いた。
「積もらないといいけどねぇ。お母さん、あんたを送ったら、そのまま帰るわ。道が凍りだしたら嫌だから」
「うん、分かった。後は私やるから、お母さんもご飯食べて」
　私はオーブンから出した、バナナとクルミの入ったパウンドケーキを冷まし、母が詰めてくれたお重を風呂敷で包んだ。

私家版‐中巻

この作品は２０１１年7月２日から２０１１年１１月２０日まで
ブログ「白嘘物語」に連載していた作品を、上中下、三巻にまとめたものの、中巻です。
完結編となる下巻もお読み頂ければ幸いに存じます。

既刊「私家版」上巻

著者：葉山ユタ

尚、ブログは２０１１年１２月より、別のアドレスに移行しております。
こちらも併せてよろしくお願い致します。
「白嘘物語‐つくも嘘物語」

２０１１年１２月２４日

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/41361

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41361